

服部宇之吉家書解題・翻刻続篇

陳 捷

【解題】

本稿は本誌第184冊に掲載した「服部宇之吉家書（附日記）解題・翻刻」の続篇である。前稿においては東京帝国大学文学部教授の中国思想史研究者である服部宇之吉がドイツおよびアメリカのハーバード大学に滞在中に繁子夫人に宛てた5通の書簡について解説し、翻刻を行ったが、その後、ご子孫の賀来孝子様が保存されている資料にはまだ服部宇之吉が中国、ドイツおよびアメリカに滞在中に繁子夫人および子供たちに宛てた書簡、葉書が存在することに気づいた。賀来様の御許可をいただき、これらの書簡を翻刻し、書簡の執筆時期などについて若干の考証を附して、前稿の続篇として発表することとした次第である。服部宇之吉の経歴および彼が中国、ドイツおよびアメリカに滞在中となった経緯に関しては前稿の解題をご参照頂きたいが、ここでは、今回翻刻する書簡の内容について簡単に解説し、読者の参考に供することとした。

今回、新たに発見された資料はその発信地から見ると、北京発9通（繁子夫人の両親・島田重礼夫婦宛の書簡1通を添付）、ドイツ発5通（長女淑子宛の葉書1通を添付）、アメリカ発5通（息子の續宛の葉書1通、宛先不明の葉書1通を添付）が含まれている。利用しやすいように、以下それぞれに番号を附し、その年代、内容について簡単に解説しておく。

一、北京発書簡

1、続・北京① [1899年] 11月4日付書簡 封筒付

本書簡は11月4日の日付があるのみであるが、和田雄治を迎えるために天津に行ったことや天長節のお祝いなどのことについて、本誌第182冊（2023年）に掲載した服部宇之吉の北京滞在日記『北馬録』にも記されていることから¹、同年のものであると判断することができる。和田雄治（1859-1918）は陸奥国二本松（現在の福島県二本松市）の生まれで服部宇之吉の同郷人であり、東京大学理科大学物理学科を卒業後、中央気象台の前身である内務省地理局測量課気象掛を勤め、1880年の富士山頂での気象観測、日本近海の海流調査研究で知られ、日本における暴風警報や天気予報の創始者で、東京理科大学の前身である東京物理学講習所の設立者の一人でもある。1903年4月初版『人事興信録』には、「(明治)三十二年御用有之清韓両国に同三十三年マニラに差遣せらる」と記されている²。もう一人の来訪者である本田種竹（1862-1907）の名は秀、字は実卿、通称は幸之助で、阿波国徳島（現在の徳島県）出身であり、京都で江馬天江、頼支峰などから漢詩を学び、1884年（明治17）に東京に出て、駅逓局御用掛、東京府御用掛、東京府属、農商務省属、東京美術学校教授、文部大臣官房秘書などを歴任し、1899年（明治32）から翌年2月まで中国各地を旅行していた。1904年（明治37）以降は官界から離れて、『日本』新聞の漢詩欄の選者を担当したほか、自然吟社を創立するなど、漢詩の世界で活躍している。本書簡において述べられている重要な用件の一つが川田鷹宛に船便で送った書籍の届け先と届け方についての説明であるが、川田鷹は東京帝國大学教授川田剛（甕江）の長男で、繁子夫人の兄・島田鈞一の妻・線子の兄

¹ 陳捷「服部宇之吉『北馬録』解題・翻刻」、1899年10月27日～31日、11月3日、『東洋文化研究所紀要』第182冊（2022年度第1期）、pp.268(63)-230(101)、東京大学東洋文化研究所、2023年1月。

² 『人事興信録』初版、p.334、人事興信所、1903年4月。

でもある。これらの書物は東大文学部教授の根本通明および友人、家族のために購入したものであり、[1900年]2月5日付の書簡においても届け方について説明している。七島生とは同じく二本松出身の七島安治のことであり、『北馬録』に彼との書簡往復の記録が多く記されていることからして、服部は留守中の用事をよく彼に頼んでいたようである。『国聞報』とは、1897年10月に天津で創刊された維新派の新聞紙であり、送り先の「翰殿」とは繁子夫人の弟で、のち漢籍書誌学者として知られるようになる島田翰のことである。北京に到着してからちょうど一ヶ月経ったところであり、日常生活の報告として、現地の気候と必要な服装についてかなり詳しく述べており、とくに外出の際の便利のために、時には外観だけでも中国人を真似する必要があるとの記載は興味深い。書簡とともに、「富貴神仙」の文字と花模様が印刷されている二枚の赤色の詩箋に書かれた和歌が同封されており、故郷と家族を思う気持ちを詠っている。

2. 続・北京② [1899年] 11月16日付書簡

北京①を投函した後の11月9日に、繁子夫人の10月27日付の手紙を受取ったのちのものである。矢野公使夫婦を含む知人たちの帰国の予定を知らせており、郵便が不便であるため、情報と物品の伝達とは往来する知人に頼ることが多かったようである。また、11月末以降、郵便物は天津の海河が凍るために山海関を廻ることになるため、今までより日数がかかることや、普段の食物は十分であるが、海苔、羊羹、甘納豆や煙草といった日本製品が重宝されていたことなどを述べており、当時北京に滞在していた日本人の生活の状況を伺うことができる。北京の城門が午後六時に締まることに気付かず、入城できなくなりそうになったという経験から見て、まだ北京の生活に慣れていなかったように思われる。またその際に見物した「城外書林骨董店」とは、恐らくは著名な書店骨董街である琉璃廠のことであり、『北馬録』同年11月3日の天長節

の日の記録には、橋口大尉と一緒に写真を撮影した後「一時半ヨリ琉璃廠ニ至リ古玩ヲ見、帰途七時ヨリ公使館ノ祝宴ニ列ス」と記されている。

3. 続・北京③ [1899年] 12月7日付書簡

繁子夫人の11月24日付の手紙および為替券を受取ってからの返信である。『北馬録』同年12月5日には、「留守宅手紙（為替券三十円入）」を受取ったとの記録がある。北京での生活を始めてから予想より金がかかり、家から送金してもらったものようである。また、海河が凍ることは少し遅れたようだが、郵便物がまもなく山海関を経由するようになるものようである。さらに、秋の快晴と、土沙が飛んで空の色が黄色となる「朔風」から強い印象を受けたことを述べている。

4. 続・北京④ [1900年] 2月5日付書簡 封筒付

本書簡には2月5日の日付があり、日本より新年の賀状を受取った際の嬉しい気持ちや東京にいる家族が年賀のために忙しくしていることへの心遣いが述べられている。先便で依頼した、お世話になった公使館員の夫人たちへの贈り物を受取ったとの報告と同時に、石井夫人が流産して産褥熱と診断されたことや、西公使夫婦が北京在任中に、東京にいる長男が病気で急死したことなども記されており、共に北京に滞在している日本人同士の苦労を伝えている。また、ベストが日本全国で流行っているにもかかわらず、東京には入っていないと聞いて安心したことや、中国でのジフテリアと天然痘の流行の様子を伝えている。手紙が記された日は農曆正月の初六日で、中国ではまだ春節の最中であつたため、先便（未見）で紹介した北京の年末の報告の続きとして、新年初日からの爆竹、食物、祭礼、服装などの風俗を含む年始の様子をかなり詳しく綴っており、中国社会に対する鋭い観察力が伺える。娘の淑に対する教育方法、息子の纘の喘息への心配、風俗写真の代わりに送った正月に貼る年画や満

州族の婦人の服装に関する説明などから、家族への思いやりを読み取ることができる。なお、濱尾様とは文部省専門学務局長、帝国大学（のち東京帝国大学、現東京大学）総長、文部大臣などを歴任する濱尾新（1849-1925）であり、「外山様」とは文学博士、東京帝国大学文科大学長・総長、文部大臣を歴任した外山正一（1848-1900、号は、山 [ちゅざん]）である。二人とも服部宇之吉のことを高く評価し、信頼していた。外山の病気について、『北馬録』同年2月7日には「今日留守宅、外山先生、高山氏ニ手紙出ス。外山先生ハ病氣ノヨシニ付、見舞ノ為メナリ」と記されており、病氣見舞のために外山氏に手紙を出したことを裏付けられる。

5. 続・北京⑤ [1900年] 2月11日付書簡（附：島田重礼夫婦宛書簡）

2月11日紀元節の日付があり、まず12月15日から1月9日までに風邪と正月の年始のために手紙を出さなかったことで東京の家族を心配させたことに対する説明や、親族が亡くなったことへの驚きや香奠などのことが記されている。「朝ハ大抵八時に起き、夜ハ十二時少し過ぎまで読書」をしていたことや、「日本に居ると違ひ、別に用無きゆえ、読書時間多く、此ハ結構に候。」と述べており、この時期においては基本的に一日中下宿で読書していた様子を知ることができる。女子にノロケル機会がないとの弁明として、「外国人を鬼か何かの如く思ひ居り、路を行きて年若き婦人に出逢ふと、先方より急に路を転じて避け候」と説明しており、冗談でありながらも、当時の中国女性の外国人に対する警戒の様を伺うことができる。繁子夫人の両親である島田重礼夫婦宛の手紙も同封されており、挨拶とともに現地の気候と自分の健康とを報告している。

6. 続・北京⑥ [1900年2月] 18日付書簡

本書簡は前の部分が欠けており、末尾に「18日」の日付のみ記されているが、本文に「年始状の外ニ、一月十三日、二十二日、二月七日、同十二日各一

通差出置候。二月十二日のハ台町へ同封にて差出候」とあるため、早くとも2月以降のものであることが判る。2月12日に送付した書簡に「台町」、すなわち島田重礼夫婦への書簡も同封したとあるのは、2月11日紀元節の夜に認められた続・北京⑤であるものと思われ、本書簡はその一週間後の2月18日に記されたものと推測できる。冒頭部分で謝っているのは、恐らくは前便で記したように12月15日から1月9日まで自宅に手紙を出さなかったことに対するもので、『北馬録』2月27日に「一月二十日過まで当方よりの手紙届かざるに付、留守宅ハ無論、島田、安井両家にて非常に心配し、釣一兄ハ処、奔走されたるよし委しく申し来らる。丁度当方にも留守宅の音信無しとし心配したる時と相前後せり」と記されているように、通信が不便な当時において手紙が遅れることで家族の安否を心配していた人々の気持ちを伺うことができる。また、手紙だけでは意思の疎通が難しく、誤解も生じがちであり、今回は繁子夫人が宇之吉の歌の意味を誤解したようである。「日本新聞」とは前出の本田種竹が後に漢詩欄の選者を担当することとなる日刊新聞『日本』のことであり、服部宇之吉は収入源の一つとしてこの新聞に投稿していた³。「亡信児」とは生まれてすぐ亡くなった息子の信のことである。狩野氏とは京都大学文学部教授の狩野直喜のことであり、服部宇之吉と同じく文部省派遣の留学生としてこの時北京への留学を準備していた。このことについて狩野直喜は、のちに服部宇之吉を追悼した文章において、「明治三十二年に東西大学総長の推薦で最初の支那留学生として、先生と私の二人が選ばれたのである。先生は早速同年の冬に赴かれ、私は文部省の都合もあり、渤海湾の結氷のため翌年四月になつて出発した。」と述べている⁴。

³ 日刊新聞『日本』は1889年（明治22）2月11日に創刊して1914年（大正3）12月31日に休刊し、1925年（大正14）に小川平吉により『日本新聞』として再創刊された。

⁴ 狩野直喜「服部先生の思出」、『漢学会雑誌』第7年第3号、1939（昭和14）年11月5日発行、のち『読書餘』（みすず書房、1980年6月）に収録されている。

7, 続・北京⑦ [1900年] 4月6日付書簡 封筒付

繁子夫人より2月23日に発送された手紙を受取った日に記した返信であり、3月以降日本に送った手紙が届いたか否かについて確認している。前出の外山正一は同年3月8日に中耳炎からの脳症により51歳で亡くなっており、『北馬録』3月24日には、「留守宅、丸山熊男氏の手紙請取ル。外山先生危篤ノ旨、共ニ報アリ。同時ニ新聞ニテ死去ノ旨ヲ知ル。痛歎ノ外無シ。」と記されている。本書簡において言及されているもう一つの重要な事件は同年3月31日に航海中に座礁した東京丸のことであり、本来狩野直喜がこの船で天津に渡る予定であったため、服部は事故の情報を受けたいへん心配していたが、その後狩野氏が本便に乗らなかったことを知り、やっと安心したようである。『北馬録』同年4月2日には、「東京丸沈没ノヨシ。何処ニテ何時起リシカハ明ナラズ。狩野君或ハ之ニ便乗サレ居ラズヤト思フ。乗組員無事ト云フコトナレト、船員ノコトカ乗客ノコトカ不明ノヨシ。急ニ古城君ニ手紙ヲ遣リ、之ヲ知ラス。」と記されており、動揺していた様子を伺うことができる。また4月4日に「中村君ヨリ、昨夜小村君ヨリ狩野君乗組ミ居ラズトノ電報アリシ旨報ゼラレ、始メテ安心ス」、4月6日に「今日参謀本部ヨリ斎藤、鈴木二大尉来着、東京丸難船ノ実情ヲ知ル。」とあり、本書簡に記載の内容と一致している。

8, 続・北京⑧ [1900年] 4月17日付書簡 封筒付

4月16日に北京に到着した狩野直喜より、繁子夫人と島田重礼、安井小太郎両家からの品物を受け取り、家族の近況を聞いた翌日に記した書簡であり、幸運にも船難から逃れた狩野直喜の出迎えと世話とで忙しい様子を伺うことができる。『北馬録』4月16日に「石井君より狩野氏、寺尾亨氏ト同行来京ノ報アリ、即古城、小野二氏ヲ誘ヒ、馬家堡ニ出迎フ。四時過当館ニ着ス。留守宅始メノ音信ヲ知ル。」とあり、また4月17日には「朝狩野君ヲ誘ヒ公使館等ヲ廻リ、礼ヲ為シ、夕刻帰宅。」と記されている。前文に引用した狩野直喜「服

部先生の思出」には、「天津について北京行の汽車に乗つたが、その終点といつて降ろされたとき、私はすっかり面喰つた。坦々として北京が何処か分らぬのである。そこは馬家堡といふ小村で、正陽門に辿りついたのは車で半時間以上も揺られた後のことであつた。正陽門までは先生がわざ／＼お出迎へ下さつて、車をつらねて東四北六条胡同の宿舎に案内された。(中略)同じ屋根の下で起居を俱にするやうになつてからは、何分先生は四ヶ月も先に来ておられることであり、言葉もお達者なら事情にも通達しておられ、何かと御指導にあづかつた。」と回想している。なお、この時には生活が安定し、自宅に送金できる経済的な余裕もできていたようである。

9. 続・北京⑨ [1900年] 5月9日付書簡

5月9日付の書簡であり、冒頭において触れられている、島田重礼および繁子夫人からの手紙を受取った事について、『北馬録』4月24日には「留守宅、島田氏、七島、岡野等ノ手紙請取ル。留守宅の状況委細承知ス。」と記されている。4月27日から30日までの間、明の十三陵および長城の見物に出かけたため、返信を記すことが少し遅れたのであろう。この三泊四日の旅行は北京到着以降における初めての見学旅行であり、『北馬録』には毎日の路程が詳しく記されているが、長城についての感想は「嶺上ヨリ臨メバ、路ハ遙ニ下方ニアリ。八達嶺ニ達スル前ヨリ天陰リ、風起リ、黄土ヲ吹き上げ、天色暗蒙タリ。八達嶺ニ至レバ、風益盛ニナリ、前程望見スベカラズ。」(4月29日)とあるのみであるが、書簡の方からは当時の気持ちを読み取ることができる。また宿泊した旅館に関して日記には全く記されておらず、書簡の内容から当時北京郊外の旅行でさえ極めて不便であった様子を伺うことができる。なお、書簡においては皇太子の結婚式の祝賀会の準備に言及しているが、同年5月10日に、のちに大正天皇となる皇太子嘉仁親王の結婚式が海外の皇室の例も参考にして盛大に行われ、日本国内において奉祝会の開催などが行われたのみならず、海

外の日本人社会においても注目を集めていた。『北馬録』によれば、結婚式当日の午後、服部宇之吉が宿泊していた公館で園遊会のような祝賀会が開催され、そのため服部も前日から準備で忙しかったようである。

10、続・北京〔附録1〕 明治33年（1900年）5月31日付領収書1通、封筒1枚

明治33年（1900）5月31日付の領収書1枚で、電報を受取った際のものである。『北馬録』5月31日に「今夜翰氏より七月来ルとの電報あれども、已に手紙を出した後ゆえ返電せず」とあり、この領収書は、繁子夫人の弟で、のちに漢籍書誌学者として知られるようになった島田翰から電報を受取った際のものであると思われる。もともとは続・北京①の〔1899年〕11月4日付書簡とともに一つの封筒に入れられていたものであり、封筒裏の「武藏／東京・卅三年六月・六日・□便」との消印の日付が領収書の日付に近いが、書簡の日付とかなり離れており、封筒は書簡が本来入れられていた封筒ではないと推定される。そのため領収書と封筒を、書簡とは別にして、〔附録1〕として「北京発書簡」の最後に置くことにした。なお、上記の電報を受け取った前後において、『北馬録』に島田翰について「翰氏の事ハ愈呉先生も承諾サレシニ付、急ニ島田家ニ通知サレ度旨云ハル」（1900年4月10日）、「翰氏の事申送ル」（同年4月12日）、「島田氏ヨリハ翰氏ノ事問合セノ条、アリ」、「翰氏ノ事ニ関シ一応面談ヲ要スルユエ、（中略）面談ノ上十一時帰ル」（同年5月27日）、「翰氏来清の決心申来ル」（6月2日）などと記載されている。これらを合わせて考えてみるならば、当時島田翰が服部宇之吉の斡旋で仕事を探しており、またそのために北京に訪れることをほぼ決めていたことが窺えるが、その後の北京の情勢の突然の変化により実現できなかったものと推測される。

ンカ) →スエズ (エジプト) →ポートサイド (エジプト) →マルセイユ (フランス) →パリ (フランス) までの旅の経路を窺うことができるが、17 通の書簡と 9 通の葉書については今のところ見当たらない。本書簡の本文によれば、パリから夜行列車に乗り、エルベスタからドイツに入ってケルンで乗り換えてベルリンに到着し、一日休んで翌日ライプツィヒに向かったようである。フランスから電報で連絡した呉秀三 (1865-1932) は、1890 年に帝国大学医科大学を卒業した医学者であり、1896 年に医科大学の助教授としてオーストリア、ドイツに留学し、1897 年 7 月～1901 年 10 月に文部省の指示によりウィーン大学で学び、のち日本の近代精神病学を創立した。呉秀三の代わりに駅まで出迎えてくれた芳賀矢一 (1867-1927) は帝国大学文科大学を卒業し、1898 年に東京帝国大学助教授となり、1900 年から 1902 年にドイツに留学してドイツの文献学を学び、のち東京帝国大学国語国文学の教授として日本近代の国文学の基礎を築いた人物である。服部がベルリンに滞在中のことについて芳賀矢一は、服部と共通の知人で、東京帝国大学文科大学美学講座の教授である大塚保治宛の絵葉書において「服部氏は廿一日着廿三日には萊府^{ライプツヒ}へ行かれ候」と報告しており⁶、その時のことを日記においても詳しく記している⁷。本書簡の内容の理解に資するものであるため、関係部分をここに掲載しておく⁸。

⁶ 芳賀矢一選集編集委員会編『芳賀矢一選集』第 7 卷「雑篇・資料編」、p.20、国学院大学発行、1992。

⁷ 芳賀矢一『留学日誌』、芳賀檀編『芳賀矢一文集』(富山房、1937)、のち芳賀矢一選集編集委員会編『芳賀矢一選集』第 7 卷「雑篇・資料編」所収。なお、『留学日誌』について『文集』、『選集』に収録の際に意図的省略・修正された箇所があるため、長島弘明「〈翻・複〉芳賀矢一『留学日誌』—東京大学国文学研究室蔵本の影印と翻刻」(『東京大学国文学論集』14、2019) は東大国文学研究室蔵自筆本による部分について新たな翻刻を行うと同時に全冊の写真を収録している。

⁸ 芳賀矢一『留学日誌』(明治 34 年)、前出『芳賀矢一選集』第 7 卷「雑篇・資料編」。

1月21日：「服部氏今夕着の由を聞き立花氏宅にいたる。福原在り。同行してプツタメ、プラツツにいたり珈琲亭に入り珈琲一杯を傾く。五時五十四分汽車着す。服部氏とドロシケに同乗一先ビルンバウムに着す。それより福原と三人クリューゲルに晚餐。岡田、立花等を訪ひ服部氏を其寓に送りてかへる。」

1月22日：「曇 朝服部氏を訪ひともに馬車にてフリードリツヒ街停車場にいたる。荷物未着の由なるを以て電報を依頼しリンデンより歩して公使館にいたり水野氏に面晤。クリューゲルに午餐。午後服部氏余が寓に在りて談ず。夜岡田氏を訪ふ。服部氏の支那談を聞き十一時帰寓。」

1月23日：「快晴 服部氏を訪ひ汽車にて停車場にいたる。荷物已に來れり。よりにて馬車にてのビルウノバウムにかへり同處に午餐。午後二時岡田氏宅にいたり三時半アンハルテル、バーンホーフにゆく。同氏ライブツヒ行を送らんが為めなり。岡田、正木、福原三氏も同車にて出発す。服部氏よりかう子書状並にかき餅一箱、佐村氏よりの味附海苔を受領す。(中略)今日の新聞に英国女皇崩殂の記事を見る。」

芳賀矢一とともに駅まで出迎えた福原繚吉とは、おそらくは福原繚二郎(1868-1932)のことであり、号は蘇洲、東京帝国大学法科大学法律学科出身の官僚である。1899年5月に教育行政法の研究のため文部省より派遣されてヨーロッパに留学。1901年6月までベルリンに滞在し、帰国してから文部省書記官、文部次官、文部省学務局長などを歴任、のち東北帝国大学総長、学習院院長、帝国美術院長などを務めている⁹。

本書簡の主な内容はフランスよりドイツに至るまでの道中の報告であり、汽車の様子、気候の変化、ドイツの朝は日本より遅いことや市中の建物が立派であるなどのことが記されており、欧州に到着したばかりの際の新鮮な気持ちを伺うことができる。

また、同じく1月22日付の別紙1枚と封筒の書き方の見本1枚があり、前者はベルリンに無事に到着した報告の短簡で、後者は繁子夫人に対しての、封筒に記されている住所および宛名の意味の説明である。

2. 続・独② [1901年] 9月14日付書簡 封筒付

文末には9月14日の日付のみ記されているが、前稿で述べたように、1902年6月に帰国が決まり、パリに立ち寄ってロンドンよりアメリカを経由して8月に日本に戻っていることから、本書簡は1901年に書かれたものと判断できる。書簡には子供の病気と繁子夫人の母親の御岳参詣のことについて記されており、日本にいる家族への思いが綴られている。また原稿料が安いことに落胆していたようで、日本新聞への投稿がまだ続いていたことが伺える。ベルリン滞在中の芳賀矢一の下宿のドイツ人夫婦に関する噂話についてかなり長く記されているが、実は芳賀矢一は前月の8月26日から8月30日まで避暑のためライプツィヒを訪ね、服部の下宿に泊まりながらライプツィヒ見物を楽しんでいた¹⁰。上記の噂は恐らく芳賀が滞在中に服部に話したものであろうが、二人ともそれをドイツの風俗の乱れとして強い衝撃を受けたようである。これらの西洋社会に対する観察は、その後の服部の道德観と家庭像の理想にも影響しているものと思われる。

なお、服部のドイツ留学に関する記録は少ないが、芳賀は訪問中、服部とともに寝起きしていたため、彼の日記から服部のライプツィヒでの留学環境と生

⁹ 福原鎌二郎『蘇洲詩存』、詩集1冊、別冊1冊（福原鎌二郎履歴）、昭和7年寺岡富士刊の補訂復刊、1985.6、福原吉野発行、独歩書林（武蔵野）。芳賀矢一と福原鎌二郎とは東大出身の友人であり、芳賀がベルリンに到着したばかりの時、まず福原の下宿を訪ね（長島弘明「＜翻・複＞ 芳賀矢一『留学日誌』—東京大学国文学研究室蔵本の影印と翻刻」明治33年10月28日、『東京大学国文学論集』14、p.134、2019）、福原が1900年7月に帰国するまで、よくともに行動していた。

活とを垣間見ることができる。今後の研究のために芳賀のライブツィヒ滞在中の日記を掲載しておく。

八月二十六日 晴 八時ポツダム停車場よりライブチツヒに遊ぶ。十二時服部氏の寓に着。同氏とともにチューンゲル、ホーフに午餐。川合氏に逢ふ。午後山口氏を其寓に訪ひ、同行して劇場茶屋にて晚餐。メツセの最中なるを以て活動写真、人魚等を見てかへる。

八月二十七日 晴 小雨 書肆リービツシにいたり書庫を一覧。午後書肆博物館にいたり、一覧の後マヤー印刷所に至り、帰途山口氏を訪ふ。

八月二十八日 雨 午後晴 朝雨を冒してコンセルヴァトリウム、ゲヴァンドハウス等を見、人類学博物館にいたる。日本物は伯林よりも多し。チューンゲル、ホーフに午餐。午後金子氏とシルラー、ハウスにいたり、帰途ゴーゼンの酒店に憩ひ、ゴーゼン一杯を傾く。四時山口、川合二氏とマヤー書籍工場を見る。壮大驚くべし。

八月二十九日 晴 小雨 十時山口氏来る。十時半の汽車にてハルレに赴き、金玉と称する店に麦酒を傾け、案内書を手にしてライブチツヒ街よりマルクト、プラッツにいたり、マリエン寺の塔上に上り、又大学、劇場等を見て、モリツ城の廃址を探り、帰途フランキツセ、スチフトンゲンをみる。晚帰

¹⁰ 芳賀矢一『留学日誌』（明治34年、1901）、『芳賀矢一選集』第7巻「雑篇・資料編」、pp.209-210。なお、それより少し前の七月二十日の、芳賀のライブツィヒにいる友人、大幸勇吉氏宛の絵葉書において、「暑いのに閉口なることは御同感々々。八月には宿の人々海水浴に出掛ける由に付、小生等は是非ともどこかに行かざるべからず。先日服部君よりライブツィヒ近傍の避暑地御通知被下候へども、遠方の事故直にそれとも取極かね居り候。いづれ五六日中にはどこかに取極め一ヶ月を涼しくくらし度と存候候」と、下宿の主人一家が海水浴に行く予定であることと、服部から誘いを受けたことが記されている。『芳賀矢一選集』第7巻「雑篇・資料編」、pp.35-36。



図2 ヤフーオークションに出品された服部宇之吉が受勲した明治勲章勲六等勲記¹¹

寓、服部氏と日本会に出席、金子、川合、山口、北里、気賀、奥島等なり。
 八月三十日 晴 小雨 八時服部君の寓を辞し急行にて十一時伯林に入る。
 服部氏停車場に送らる。(以下略)

3. 続・独③ [1901年] 10月30日付書簡

文末には10月30日の日付のみあるが、先便と同じ理由によって1901年の書簡であると判断できる。服部宇之吉の留守中の1901年8月31日に、1900年の北京における義和団事件の際の功績により、明治勲章の勲六等单光旭日章及び金三百円の下賜金を授けられており(図2)、繁子夫人から届いた9月23日付の書簡において言及されている下賜金とは、恐らくはそのことであろう。本書簡によれば、当時繁子夫人は借金をして土地を買うことを考えていたようであるが、海外に滞在中の服部宇之吉は旅行するほどの金もなく送金もできず、借金についてかなり慎重だったものようである。このような慎重な態度は後日アメリカ滞在中に記した書簡からも見られるものであり、服部宇之吉の金銭に対する考え方を伺うことができる。本書簡が記された時には、服部がド

¹¹ <https://page.auctions.yahoo.co.jp/jp/auction/n1140454601>、2024年9月1日閲覧。

イツに到着してからすでに8ヶ月近くが経っており、安定した勉強生活を送っていた様子が伝わってくる。書簡の最後には、「自分も当地にてハ唯勉強一方にて、芝居も見ず、此の頃ハ運動散歩の外にハ何も別に慰みも無之候。河合君も同然に候。ツマリ日本に居るよりハ読書の時間多きのみにて、他にハ何も益無之候」と書かれており、毎日勉強に専念し、運動散歩の外には何の娯楽もないと記しており、ドイツ留学中の様子を何う貴重な記録となっている。

なお、本書簡に見える「河合君」とは、同じ時期にライプツィヒに留学していた友人であり、恐らくは先に引用した芳賀矢一『留学日誌』に出ている「川合氏」と同一人物であろう。文部省専門学務局発行の『(明治三十五年三月三十一日現在) 文部省外国留学生表』によれば、当時文部省の派遣によってドイツ留学中の日本人のうち「河合」という苗字の留学生が二人おり、一人は東京帝国大学農科大学助教授の河合鉢太郎で、森林利用学を勉強するために1899年9月から3年間の予定で派遣され、ドイツ・オーストリアに留学していた¹²。鉢太郎は森林開発と営林制度を学び、1903年に帰国して東京帝国大学教授に就任し、留学先で知り合った後藤新平の誘いで台湾に渡り阿里山の森林を調査し、その開発に貢献した。もう一人は京都帝国大学理工科大学助教授の河合十太郎で、数学を学ぶために1901年4月から1903年4月までの満2年ドイツに派遣されていた¹³。ライプツィヒ大学に学び2年後の1903年5月26日に帰国してすぐ京都帝国大学理工科大学教授に昇進し、同大学理学部数学科の基礎を作った人物である¹⁴。十太郎は東大卒業後しばらく京都の第三高等学校の職員、教員として勤め、同じく三高の教員であった服部とは親友であった。服部

¹² 『文部省外国留学生表』明治35年3月31日調、文部省専門学務局、明治35-45年、国会図書館蔵（請求記号：特45-829）、p.3。

¹³ 同前註、p.10。

¹⁴ 高瀬正仁「数学の泉・河合十太郎の歩み—京都帝大の数学科の成立まで（三）」、『Web日本評論』、<https://www.web-nippy.jp/19200/>、2024年8月31日に閲覧。

は1899年に清国留学の途中、京都に立ち寄った際に河合を訪ね、また河合夫婦がそろって三高の友人とともに服部を見送ったことが『北馬録』に記されている¹⁵。次便において見られるように、服部がドイツ留学を中断して清朝の京師大学堂の招聘を受けるという重大な決定をした際にわざわざライプツィヒまで行って相談したほど彼を頼りにしていたことから、ここでの河合氏とは、三高時代の親友であった河合十太郎氏であった可能性が高いものと思われる。

4. 続・独④ [1902年] 4月30日付絵葉書 1枚 服部淑子宛

4月30日付の、ベルリンから娘の淑子宛の絵葉書である。前出の芳賀矢一『留学日誌』には、1902年4月22日、5月4日、5月8日、5月12日などに服部の記事が見られることから、この時期すでに、ライプツィヒからベルリンに移っていたことが窺えるが¹⁶、本葉書において下宿の家の娘を紹介していることから、恐らくベルリンに移ったばかりの時のものであると思われる。

5. 続・独⑤ [1902年] 6月17日付書簡 封筒付

本書簡の末尾に6月17日の日付のみがあるが、帰国の事情について説明している内容から、1902年のものであると判断できる。服部がドイツ留学中に文部省より呼び戻され、清朝政府の招聘に応じて現在の北京大学の前身である京師大学堂の師範館の総教習になったことに関しては、前稿に収録された[1902年]6月26日付書簡の解題においてすでに説明しているので参照いただきたいが、今回新たに発見した2通の書簡によりその前後の状況をより詳しく知ることが可能となった。本書簡は5枚のやや硬い紙の片面に書かれており、

¹⁵ 前出、陳捷「服部宇之吉『北馬録』解題・翻刻」、1899年9月19日、20日、pp.265(66)-264(67)。

¹⁶ 芳賀矢一『留学日誌』明治35年4月22日、5月4日、5月8日、5月12日、『芳賀矢一選集』第7巻「雑篇・資料編」、p.236、p.237、p.238。

一折りして封筒に収められている。封筒裏の住所からみて、ベルリンのシュトローム通り10のaのiiから送信したことが伺える。書簡の主な内容は、前日に公使に呼ばれて至急公使館に出頭し、文部大丞からの電報を受け、直ぐに帰国して清朝政府よりの京師大学堂師範科教頭の招聘に応じることになった経緯を述べており、繁子夫人に相談しないまま今回の決定を下した理由と、今後の帰国の日程および中国に行く前に必要な準備について説明している。書簡に記された文部大丞からの電報の全文においては、任期三年、月給一ヶ月五百円、住居を与えられ、助教授も雇うことができるという清朝政府から提示された条件や、すでに東京帝国大学総長の同意を得ていることなどを記しており、返信は電報にすべしと言っていることと、服部に対して引受けることを「望む」という表現を使っていることから、文部省においてすでにいろいろな調整を行い、服部の承諾を待ち望んでいる状況であったことが窺える。

電報を受けた服部からすれば、本件はまず自分の中国研究にとってのよい機会であり、それと同時に、「支那に於ける教育の権を日本人の手に握るべしと主張した」彼自身の従来を考えを実現する絶好のチャンスでもあることから引受けたいと思ったようであるが、一方、今までの海外留学と違い、今回は清朝政府の仕事であり、現地の人々の信用を得るために家族とともに赴任することが必要だと思われたため、家族の同意を得ることができるかどうかを心配していたようである。本書簡の内容から見て、この時点において服部は夫人と子供だけではなく、島田重礼夫婦をも一緒に中国に連れて行くことを考えていたようである。本件は服部自身のみならず、家族にとっても重大な決定であるが、返答する前に東京にいる家族と相談する時間的な余裕がなかったため、服部はわざわざライブツィヒに行き、友人の河合氏と相談したうえで公使と文部大丞に返信して引き受けることにしたもののようである。

ドイツから緊急帰国して中国に渡った経緯については、服部自身、のちに度々振り返っているが、本書簡は決定を下した時点での家族に対する説明であ

ることもあってもっとも詳しいものであり、当時の緊張感と彼の思いとが生き生きと伝わってくるもののように思われる。

書簡の後半は帰国および北京への出発の日程、島田重礼夫婦に同行して頂く際の問題点の検討と、北京に行くための準備事項などの説明である。服部からみれば、家族一同北京で生活することについてもっとも心配していたのは、島田重礼夫婦が北京行に同意するかどうかであったが、彼自身は清朝政府から広い家とよい収入が提供され、気候の寒暑も設備で解決でき、特に心配なく人々に尊敬されるような暮しができるものと考えていた。また自分が経験した北京籠城のような事件の再発についての不安に対しては、現在の北京には各国の駐屯兵がいるため、同様の事件は起こりにくいと説明している。また、北京に行く前の準備について、十箇条を挙げて詳しく記されており、子供の保育と裁縫とを兼任できる、教育を受けたことがある下女と中学卒業の若手書生を1名ずつ探すこととともに、布団、蚊帳、衣服およびその他の生活用品と備品、薬、子供の玩具と教育用具や日本食の食材などを準備することが含まれている。そこには以前の北京生活の経験が生かされていると同時に、服部の日常生活に対する緻密な処理能力をも垣間見ることができる。1900年に服部とともに北京で暮らしていた狩野直喜が服部の追悼文において、「かうしたいろいろと厄介なところにあて、殆んど何の失敗もせずすんだのは全く先生の御蔭であつて、学問上ではもとよりのこと、その常識に富み日常の瑣事に通じ、学識と常識二つながら円満な発達を遂げておられたことに心から敬服した次第である。」と記しているのは、まさしくこのような日常生活における服部の能力のことであったろう¹⁷。

¹⁷ 註4 狩野直喜「服部先生の思出」。

6, 続・独⑥ [1902年] 6月21日付書簡 封筒付

書簡の末尾に「六月二十一日朝」との日付のみ記されているが、帰国のことを記していることから、前便の直後に書かれたものであると判断できる。帰国の旅程については最初印度洋経由を考えていたようであるが、前日に文部省よりアメリカ経由の許可を得たため、早速、ロンドン（船、約7日間）→ニューヨーク（1泊、直行汽車、約5日間）→シアトル（1泊、船で直行、約15日間）→横浜とのちょうど一ヶ月程の旅程を手配し、この変更により渡航にかかる時間が半月も節約できたようである。書簡の後半では中国に行くための準備について述べられており、8月に東京に戻ってから一ヶ月後の9月に北京へ出発というハードスケジュールであるが、「万事の支度ハ自分帰るまで待つべし」とは、繁子夫人にとって頼もしいメッセージであったろう。所持の漢籍に関しては、一部を除き東京で売却してその金で中国でまた購入することとし、売却は書籍のことに詳しい繁子夫人の兄である島田鈞一と姉兄である安井小太郎と相談して処理することを考えていたようであるが、このような処理の仕方からも、前文で述べたような服部の的確な事務処理能力を伺うことができる。

三、アメリカ発書簡5通、葉書2枚

前稿において下記の通り、服部宇之吉が1915年～1916年にアメリカのハーバード大学日本講座で教授を務めていた期間中に繁子夫人に宛てた4通の書簡と同封されていた日記を翻刻したが、今回は新たに同じ期間中に記された書簡5通と葉書2枚を翻刻した。

前稿収録分：

[1915年10月] 22日付書簡（附：[1915年] 10月11日～15日日記）

[1915年] 11月13日付書簡

[1916年] 3月1日付書簡（附：1915年2月19日～29日日記）

[1916年] 4月13日付書簡

1, 続・米① [1915年11月] 20日

5枚の紙に片面のみを用いて、各紙の先頭に(一)、(二)のように順番を記している。書簡の末尾には「二十日」の日付しかないが、10月21、28日付の繁子夫人の書簡を受取り、長男の纘が旅行から戻ったことが書かれているため、前稿に収録されている、その旅行に言及した[1915年10月]22日付書簡の後のものであることが分る。Thanksgiving Dayのことを述べていることから、11月の書簡であると判断できる。基夫とは長女淑子の夫である柳生基夫のことであり、柳生老人とは基夫の父親であり、牛込区若松町に住んでいた柳生房義のことである。基夫の姉ちせは東大卒業の医師、百瀬玄溪と結婚しており、淑子の手紙から伝えられたのは恐らくその親戚間のことであったろう。一方、今岡とは服部のアメリカ滞在中の助手であった今岡信一良のことであり、その詳細に関しては前稿の解題を参考されたい。三浦環とは東京音楽学校出身の女性オペラ歌手で、プッチーニの『蝶々夫人』を演じて国際的な名声を得て「マダム・バタフライ」と称され、この時期ちょうどボストンで公演していた。明治聖徳紀念学会とは、明治天皇を記念して、日本文化と神道の研究を目的に、東京帝大文科大学哲学科卒業の宗教学者である加藤玄智(1873-1965)を中心として、1912年11月に創設された組織である。長井真琴(1881-1970)は東京帝大文科大学卒業の仏教学者で、パリ語仏典研究の先駆者であり、のち東京帝大の教授となるが、明治聖徳紀念学会の創立ののち、その代表者を務めていた。服部は同学会の創立当時からかわりを有しており、評議員を務めたほか、1914年に同学会において「日本文化の支那に及ぼせる影響」との題目で講演を行い、またアメリカから帰国後に「余の見聞したる米国」と題する講演を行い、それぞれ学会の紀要に掲載されている¹⁸。渋沢男とは渋沢栄一男爵のことであり、後で述べるように同年11月末にボストンを訪れ、服部は現地日本人代表としてその歓迎の任に当たっていた。

本書簡が記された際には、ボストンにすでに二ヶ月程滞在して少し慣れてき

ていたようであるが、日本より物価が高いため、出費のことをかなり気にしており、日常生活にかかる費用について細かく記している。日々の生活においてできるだけ節約しようとしていたが、助手や周りの友人たちに配慮して御馳走したり、映画に招待したりしている。また、家族や親戚たちに対する思いも厚く、親戚関係の対応についてもアドバイスをしている。娘婿の柳生基夫より鉄道関係の本を依頼されると、わざわざ専門家に問合せして、「書物の注文は最も悦ばしく候」と漏らした一言は、いかにも学問を一番大事にする書生らしい心情であろう。また、纘と基夫の筆不精への愚痴や、子供たちのために買った絵本と附録についての細かい説明などから、子煩悩な父親であったことがうかがえる。

2. 続・米② [1915年] 11月24日

前稿の[1915年10月]22日付書簡と[1915年11月]20日付の前便のいずれにおいてもスウィフト氏への謝礼に言及しているが、本書簡にはその謝礼の件が分かったとの内容があるため、その後にかいたものであることが分る。「十月末日附手紙昨日到着」とあるから、「十月廿一日、廿八附両信何れ」も受け取った[1915年11月]20日付の書簡より後であることも窺える。書簡に言及している「菊祭」は当日ボストンのホテル・コブレプラザで行われた大正天皇の即位を祝うイベントであるが、詳細については前稿[1915年10月]22日付書簡の解題を参照されたい。「廿九日来着の渋沢男歓迎の事」とは、前文で触れたように、渋沢栄一のボストン来訪のことである。渋沢は儒教研究と儒教思想の啓蒙活動の社会的な役割を重視して斯文会の有力な応援者となっており、服部が渡

¹⁸ 服部宇之吉「日本文化の支那に及ぼせる影響」(一)(二)(『明治聖徳紀念学会紀要』第2巻、pp.71-88、1914年11月3日発行、同『紀要』第3巻、pp.189-206、1915年4月13日発行)、「余の見聞したる米国」(同『紀要』第6巻、pp.165-193、1916年11月3日発行)。

米する以前において幹事を務めていた帰一協会の発足人の一人であり、1915年7月7日に東京上野精養軒で開催された帰一協会の年度大会において、渡米する服部宇之吉などのために開催された送別会で渋沢は送別の辞を述べていた¹⁹。1915年10月23日から翌年1月4日まで、渋沢栄一は太平洋万国博覧会を視察するために渡米し、11月29日早朝にボストンに到着して一泊している。ボストン滞在中のことについて彼自身は日記において次のように記している（下線部は筆者によるものである）²⁰。

「十一月廿九日 曇 午前七時頃汽車ボストン市二着ス、直二下車シテ服部博士・今岡氏其他邦人・米人多ク来リ迎フ、八時〔原本欠字〕ホテル二入りテ朝飧ヲ食ス、午前九時半小雨ヲ辞セスシテ当市ノ第一国立銀行ニ抵リ、総裁及次役ニ面会シテ、日本トノ取引ニ関シ種々ノ談話ヲナス、畢テ州庁及市役所ヲ訪問シ、午前十一時エリオット博士ノ宅ニ抵リ、欧洲戦乱ニ関スル意見及支那ニ於ル事業ニ付、日米親善ノ事ヲ談ス、午後一時博士ノ接待会アリ、ハバート大学ノ教師連多ク来会ス、畢テ地方ノ豪族アンダーソン氏ノ家ヲ訪フ、家屋ノ構造壮大ニシテ美麗ナリ、夫人ト共ニ懇切ニ待遇セラレ、且茶菓ノ饗アリ、午後五時辞シテ旅宿ニ歸リ衣服ヲ改メテ当地在留邦人ノ開催セル歓迎会ニ出席ス、席上一場ノ訓示ヲ為シ、後ボストン商業会議所主催ノ晩飧会ニ出席ス、食卓上坐長其他数名ノ演説アリ、余モ一場ノ演説ヲ為シ、夜十一時旅宿ニ歸ル。

十一月三十日 半晴 午前七時半起床、洗面衣装ヲ整ヘ八時朝飧ス、此日当地ヲ発シテ紐育ニ赴ク筈ナレハ朝来旅装ヲ理ス、服部博士其他邦人来リテ

¹⁹「大正四年度本会大会」『帰一協会会報』第6号、p.280、1915年11月。

²⁰ 渋沢栄一「日記」、『渋沢栄一伝記資料』第33巻、p.45、p.51、渋沢栄一伝記資料刊行会、1960年9月。

ヲ告ク、昨日ヨリ穂積重遠ノ一行ニ加ルアリテ、共ニボストン停車場ニ抵リ、九時過ノ列車ニテホストンヲ発ス。」

上記の文章のみでは、服部は送迎だけに参加したようにも読めるかもしれないが、随行員の増田明六が記した記事によれば、服部は駅で出迎えてから第一銀行総裁、州知事、市長などへの訪問や、ハーバード大学前総長、総長たちの歓迎午餐会と茶話会など、すべての日程の案内役を務めていたことが分かる²¹。

「山川、穂積、三島三氏男爵となり候由、学界の爲めに悦び居候」とは、新たに受爵された男爵のことであるが、受爵は本書簡が記された後の12月1日に行われているため、恐らく服部は夫人の書簡より事前の伝聞を得ていたものと思われる。しかし同年男爵となった9人のうち、たしかに山川・穂積、すなわち日本人として初の物理学教授、東京帝国大学総長、九州帝国大学総長、京都帝国大学総長などを歴任した山川健次郎（1854-1931）と、日本初の法学博士の一人、帝国大学法科大学長である穂積陳重（1855-1926）の二人の学者は存在していたものの、三島という姓の人はいなかった²²。また別便で、英米両国で流行していた小説を送っていることは、当時繁子夫人の英語のレベルが、

²¹「十一月廿九日 月曜日 雨 午前八時ボストン府に到着、服部宇之吉氏・穂積重遠氏・今岡信一郎氏等の出迎を受け、直にツーレイン・ホテルに投宿。朝食の後、服部博士の案内にて同市第一銀行総裁ダニエル・ジー・ウイング氏を始として、州知事ウォルシ氏・市長カーレー氏を訪問せられ、正午ハーバード大学名誉総長エリオット博士の歓迎午餐会に臨み、午後は同大学総長ロウエル氏、及前駐日公使たりシアンダーソン氏の茶話会に臨み、夜同市在住日本人有志歓迎茶話会に出席、一場の演説を試みたる後、商業会議所主催公式晩餐会に出席、又演説し、午前一後帰宿せらる。」増田明六「青淵先生米國旅行記（二）」、『竜門雑誌』第333号、pp.64-66、1916年2月。

²²大正4年12月1日に新たに男爵を授されたのは大倉喜八郎（大倉財閥）、大森鍾一（政治家）、田中芳男（政治家）、古河虎之助（古河財閥）、穂積陳重（法学者）、三井高保（三井財閥）、森村市左衛門（森村財閥）、山川健次郎（法学者）、横田国臣（政治家）の9人である。

小説を原語で読解できるレベルに達していたことを示すものであろう。

3. 続・米③ [1916年] 日にち不明 絵葉書1枚 服部纘宛

息子の纘に宛てた絵葉書である。表はハーバード大学のワイドナー図書館の写真であり、葉書の本文に記されている通り、服部宇之吉はハーバード大学滞在中、その建物の中の研究室を使用していた。本図書館の正式名称は Harry Elkins Widener Memorial Library であり、1912年にタイタニック号の沈没で父親とともに亡くなったハーバード大学の卒業生である Harry Elkins Widener の母親が、蔵書家であった息子の遺言により、そのコレクションと図書館の建設費をハーバード大学に寄贈してつくらせたものである。書庫と本棚は最先端の設計を採用し、当時まだ珍しかった開架式で管理し、蔵書規模は当時においてはニューヨーク公共図書館、アメリカ国会図書館と並ぶものであり、世界的にもトップクラスの図書館であった。本図書館は服部宇之吉がアメリカに到着する約三ヶ月前の1915年6月24日に開館したばかりであり、その蔵書の豊富さと斬新な図書管理の理念とは、服部宇之吉にとってはかなりインパクトを有するものであったと思われる。本葉書には日付がつけられていないが、纘の学年試験と夏の入学試験に言及していることから、纘が一高の入学試験を受ける予定の1916年に入ってからのものではないかと推測される。

4. 続・米④ [1916年] 2月23日付書簡

2月23日付の書簡であり、内容から1916年のものと判断できる。前稿に収めた [1916年] 3月1日付の書簡には同年2月19日～29日の日記が同封されているが、そのうち2月23日の日記に「午後留守宅其他より手紙来る」と記されている留守宅の手紙は、恐らく本書簡冒頭にある「一月二十七日附御手紙」のことであろう。繁子夫人は夫の手紙を期待していたため、それが届かなかったことに対する落胆のあまり、手紙のなかでかなり強い表現で愚痴を記

していたようであり、字之吉は手紙が遅れた理由を説明しながら、妻と家とを思う気持ちや、妻から責められた際のショックも真摯に語っている。末尾に「郵便締切は二十六日故、今日投函しても無効故、日記と共に二十六日投函いたすべく候」と記されているように、当時の郵便状況のために、したためた返信をすぐには投函できなかったが、服部の気持ちはかなり動揺していたようであり、日記によれば、23日の後も投函できる26日まで毎日手紙を書いていたようである²³。なお、「クリスマス、新年共に一日も全く遊び候日は無之」「先日試験休み中にて一日も遊びは致さず原稿を整理し居候次第にて、只だ一日餘り頭が重いので、電車にのり郊外に行き候のみ」との内容から見て、服部はボストン滞在中かなり多忙だったようであり、また日常生活におけるプレッシャーとストレスも窺うことができる。

5. 続・米⑤ [1916年] 5月12日付書簡

5月12日深夜に記した書簡であるが、すでに帰国の日程が決まり、十九日にボストンで汽船に乗船し、船内に一泊して翌朝ニューヨークで下船し、その後夜行列車でフィラデルフィアに行き、シアトルで乗船して横浜に向かう予定であったようである。出発の前にお土産の準備と荷物の整理のほか、講義、送別会、またプリマウスすなわちプリマス (Plymouth) を見学に行くなど、大変忙しかったようであるが、まもなく家族と再会できることは服部にとってな

²³ 2月24日の日記に「夜半眼覚めたるに色々不愉快の感想起り、暫時寝られず、頭痛みて苦し。(中略) 先日送りし手紙と昨日認めしものにて疑念も去るべしと思ひ、聊か自ら心をあんずるのみ」とあり、今回の手紙によって疑いを払拭してほしいと、夫人に希望している。また2月26日の日記に「昨夜日本へ手紙認め、其残りを今朝又認め、昼前終はる。(中略) 今日郵便締切の日なるも若しケンブリッジにて投函して又後れる様の事有りてはと思ひてボストン総局に行く」とあり、郵送に遅れないために近くのケンブリッジではなく、わざわざボストン総局まで行って投函したもののようである。

よりの楽しみであったようであり、書簡の末尾に、「皆々丈夫にて身心共に平安の顔を横浜にて見ること今より一日千秋の思にて待ち居り候」と記されていることから、そのような気持ちをうかがうことができる。

6, 続・米⑥ [1916年] 5月21日付 絵葉書1枚

絵葉書には「五月二十一日」との日付のみ記されているが、内容から帰国の直前に書かれたものであることが分かる。冒頭に「(四)」の数字があり、文章も途中からのものであるため、このほかに(一)から(三)があるはずであるが、現在は不明となっている。一宮氏とは正金銀行ニューヨーク支店長の一宮鈴太郎のことであり²⁴、その夫人は服部夫婦の知り合いの河原操子で、下田歌子と親しく、二十世紀初頭において上海の務本女学堂と蒙古の喀喇沁(カラチン)王府の毓正女学堂で教師を勤め、1906年8月に帰国し、結婚して夫とともに渡米してニューヨークに駐在していた²⁵。河原操子の帰国後、当時京師大学堂師範館総教習であった服部宇之吉が、東京帝国大学理科大学の鳥居龍蔵夫人である鳥居きみ子を紹介してその後任となったのである²⁶。家永博士は家永豊吉(1862-1936)のことで、同志社英学校で勉強した後にアメリカに留学し、ジョンズ・ホプキンス大学で哲学博士号を取得して帰国、しばらく働いた後にまた渡米してコロンビア大学で講義をしていた。5月12日付の書簡にはボストン→ニューヨーク→フィラデルフィア→シアトルとの帰国の旅程を記しているが、実際はニューヨークに一日のみ滞在していろいろ見物してから汽車でワシントンに行き、そこでこの葉書を書いたもののようである。絵葉書の表は

²⁴ 前稿の翻刻において「一色」、「一ノ色」としていたのは誤りである。

²⁵ 河原操子の中国での活動について、一宮操子『蒙古土産』(実業之日本社、1909年11月、のち河原操子『カラチン王妃と私—モンゴル民族の心に生きた女性教師』として再版、芙蓉書房、1969年4月)を参照されたい。

²⁶ 鳥居龍蔵「服部先生と私」、pp.37-40、『斯文』第21編第9号、斯文会、1939年9月。

ニューヨーク市立大学シティカレッジの写真であり、恐らくは見学の際に購入したものであろう。

以上、新たに発見された書簡の執筆時期とおおよその内容について説明し、内容理解に参考になる他の人の記録も一部引用して、簡単に述べておいた。

翻刻については、各書簡に年月の時間順で配列し、番号をつけて、整理者の考察で判明した内容について [] に入れた。原文は漢字、片仮名に平仮名を交えており、また異体字も多いが、翻刻の際には通行の字体に統一することとし、仮名については原文の通りとした。なお、抹消された文字については、取り消し線を引いて示してある。

【翻刻】

一、北京発書簡

1、続・北京① [1899年] 11月4日付書簡 封筒付

(封筒)

(表) 「大日本帝国郵便」切手1枚、「SHANGHAI MAY / 14 / NOV / □□」

(消印)、「武藏 / 東京 / 卅二年十一月 / 二十三日 / □便」(消印)

[日本] 東京府下荏原郡大崎村大字 / 大崎三百六番地 / 服部繁子殿 / 平信 / Tokyo, Japan.

(裏) 清国北京日本公使館 / 服部宇之吉 / 十一月五日 歌あり

(本文)

新聞送付有之度候。未だ一回も着せず候。七島生に宜しく頼み候。

二十七日金六拾円の為替券封入。書留郵便差出置候間、御承知有之度候。仙次郎様及遠藤氏に序の節宜しく頼み候²⁷。

前略。和田雄治氏に御托の手紙及御伝言共に確に承知致し候。同氏去二十九日天津着。小生ハ前日より天津に出向し、廿九日ハ天津に一泊。三十日共に当

地に帰り、同夜ハ当館に一泊、三十一日午後同氏当地を去り、朝鮮に向われ候。多分本月二十日頃にハ帰国の筈ゆえ、其節同氏より小生の現況御聞取有之度候。又本田種竹氏ハ先日上海に向け当地出發致候が、来年始めにハ帰国の筈にて帰国の上ハ御尋ねする筈ゆえ、其時亦自分の現況ハ分るべく候。

今度日本郵船会社社長門丸便にて川田鷹氏に宛て小箱一箇送り置候間、同氏より通知あり候節ハ右請取られ、左の如く処分あり度候。

一、周易述 一套 此ハ根本通明氏の依頼品なり、代金五円請取り預り来り候処、右本金叁円半にて求候間、壹円五拾銭返され度候。

一、小唐本三套 右ハ中川正信氏の依頼品。此ハ代金拾円預り来り候が、右三套にて四円貳拾銭たり、残金ハ次の依頼もあるべきニ付、自分預かり置くべく候。

右兩種とも七鳥生ニ頼まれ度候。

一、朝鮮写真帖 一 此ハ家に留め置く分。

一、『国聞報』（新聞紙） 此ハ翰殿に贈られたく候。

昨日天長節にて朝ハ公使館に至り御真影を拝し、夜ハ同館にて祝宴を開かれ日本人三十名程集まり、中々盛会に有之候。封中の菊花ハ右宴会飾付けの花の瓣に候。本邦にて多分天気都合宜しく盛なり候事と存じ候。

当地一昨昨日久し振にて雨あり、且雷電も有之。昨日より寒気大にかわり昨日始めに薄氷を見受け候。

今年ハ旧九月九日天気晴好たり候ゆえ、冬ハ必ず寒からむと申居候。毎年旧重陽に天気晴好ならば冬に寒く、重陽に天気悪く又ハ風吹く時ハ冬暖かなりと申事に候。支那人ハ先日来皮裘を着し候居候。自分ハ着以来幸ニ一度も感冒に罹らず、今分にてハ至て健全に有之候。衣服ハ下にフランネルシャツ及びゾボ

²⁷「新聞送付」から「宜しく頼み候」までは本書簡1枚目の最初に、本文の右の餘白と第1～3行の行間にて小さい文字で書き加えたものである。

ン、上に繻絆、綿入れ一枚及び綿入れ羽織を着し居候が、今日までハ之にて十分に候。支那人ハ之に比して厚着を着し居り候。冬になれば地凍りて塵埃飛揚せざるよきに候間、寒さハ強くとも又散歩などには却て宜しかるべく候。洋服ハ先日冬着一着作り候が、多分之と有合せの物とにて此冬を凌ぐことを得べく候。支那人の家に同居することハ只今見込み無之。又支那服を着ることハ色々費用少なからず支那服ハ願ふ高価なり候間、模様によつてハ支那の外套（褂子と称す足踵まで掛かるほどの長さあり）、褲子ズボン、支那鞋及假辮子辮子に豚尾のだけにて間に合せ可申坎と存じ候。支那人薄服のままにては訪問に不便にて、往々面会を謝絶する人有之候ゆえ、外面だけ支那人の真似をすること必要となるべく存じ候。

先日風雨にて破損少からざり候よし。本年ハ水火等の災多き年にて中々多事のことに有之候。

矢野公使ハ来る十日頃出發帰朝の筈に候、三好君方に聞合せ、一寸礼に行かれ候様致度候。天長節の祝宴にて始めて同夫人に面会致候。

中川氏夫人に其中何か贈り度候間、考へられ度。当地ハ不便の処ゆえ、日本の物ハ何でも珍しく候。年若き人ゆえ、何か化粧品など宜しかるべく候。右品ハ小包になし、

清国天津日本郵政局高木／銑次郎殿氣付

北京日本公使館／服部宇之吉

宛にて差出され度候。其節同時に自分用頸巻ハンケチの大なるもの位にて汚れ目の見えぬもの宜し候。上等品にハ不及候。手袋スコフの類にて贈られ度候。乍末御老親様よろしく申上度、小兒も皆無事と存じ候。今便ハ右にて筆を止め申候。匆匆。

十一月四日

宇之吉

繁子殿

(別紙)

此頃故郷の音信久しく無かりければ、
風にだに問はましものを故郷の冬の景色ハ清国渡るやと秋の頃ハ風多かり候も此頃ハ
風だる多くハ吹かねばいへる
冬籠雁の音絶えしこの頃ハ旅の愁のいとまさり行く
同じ頃月を見て
心あらば我心をも写せかし故郷人のいかに見るやと
同じ思ひを
旅の空更け行く夜半も知らなくに故郷人を思ひしのびつ
故郷の音信を得て
待ちわびし君の玉葉見るからに心やすくもなりにけるかな

2. 続・北京② [1899年] 11月16日付書簡

去月二十七日付御手紙本月九日到着。御両親様御始め皆々無事の容子相分り安心致候。自分も幸に一度も風を引かず今分にてハ誠に大丈夫に候。当地の氣候ハ只今尤も宜しき時のよしにて、却て日本よりハ暖気かと思はれ候。当地ハ流石大陸地だけありて氣候も日本などの如く小変無之ゆえ、却て暮し良き点有之候。然し段々寒気に相成候へば要心ハ致居候。衣服ハ別に差当り必要ハ無之候間、送附にハ不及候。

矢野公使も夫人又になし少しく病気の為め出発延引之処両三日内にハ愈出發するに筈候。公使の書生に岡正一と申す人有之、隨行して帰朝し、直ぐ引返へして、本年中にハ当地に来る筈に候間、先便申し送候手袋の類ハ此人ニ依頼さるべく其旨同氏にも話致置候。矢野氏の宅ハ青山原宿のよしに候が、何れ帰京の日と共に三好氏に聞合せられ、其上矢野家に持参し候岡氏に頼まれ致候。又本月末にハ同宿の橋口大尉帰京の筈に候間、此人に当地の写真など少々頼み遣すべし候。自分の様子も此人に御聞相成候はば詳に知れ可申し候。同氏の宿処等ハ次便可申送候。

本月末か来月初めて天津の航路ハ止み候も郵便ハ上海を経て渤海湾に入り、山海関の方より陸路を経て輸送候間、日数ハ少し多く要し候も断絶すること無之候。但小包を天津迄送ることハ来春河開き後ならでハ出来申す間敷候。

食物も別に必要ハ無之。当地ハ羊、豚、牛、鶏、家鴨、鴨、鯉等の肉多く、毎日十分に食し居候。持参の海苔ハ今猶用ひ居候。先日和田氏より栄太楼の羊羹と甘納糖を貰ひ皆々にて珍しく食し候。

当地ハ煙草高価に候間、^〇千葉製^〇牡丹^〇印巻煙草百本入り三十錢位のもの少々岡氏に頼まれ度、また中川、石井等の夫人ニ贈るものも同氏ニ頼まれ候便宜と存じ候。夫人への贈り物ハ日本にて近頃出来候珍しきものあれば最も宜しかるべく候。三夫人とも日本風の生活に候、石井氏方のみ女子二人有之、他ハ子供無之候。

封中北京函一葉御送付致候。自分寓処ハ朱にて△筆致置候。

当地ハ只今空気乾燥致居り候ゆえ、何物にてもカラカラニ相成、持参の清心丹の如きカチカチニなり申候。先便申し候通り、城内にハ柳、棗、槐などの外、樹木無之候が、其等の木の葉ハ決殆ど青きままにて落葉し候。此頃になりて少し黄色ニなりて落ち葉致候。紅葉ハ城中何れの処にても見るによし無く候。菊も此頃ハ末に相成候が、猶花屋にてハ插花などに作りて売り居候。路上を散歩すれば大抵何時も婚礼の行列と葬式とに出合ひ申し候。先日橋口大尉と城外書林骨董店などを見物し、少し買ひ物致^〇〇、夕方に相成り遂に気付かざ居候処、北京の城門ハ午後六時ニ閉ち、其後ハ人を入れず候をウカと気付かざりしに、馬夫馮に催促され、急に大騒ぎをして馬を走らせ、城門に至り候処已に門半ば閉ち、僅に半扇を開き居り候ニより、辛くして入城するを得候。今十分後る候時ハ、其夜ハ夜半迄城外の旅店にでも入らねばならぬとことに候。城外にも大官人住居致居り、大官の人ハ大抵午前二時に宮中に出仕致候ゆえ、^〇城外の城門ハ夜の十二時より二時頃まで開き、再び午前六時迄閉ち候。右の都合ゆえ、城外に出づる時ハ時間を始終測り居らねばならず候。

台町、三丁目皆様別状無之や。

七島生の手紙も請取り候が、今度ハ返信不致候ゆえ、宜しく頼みのみ。先ハ右のみ、匆匆。

十一月十六日夜

宇之吉

繁子殿

乍末筆御両親様にハ餘りアクセク成さらずして、御気楽に遊ばし候様申し上られ度候。御父上様にハ毎日掃除だけでも御骨の折れ候ことと存じ候。時々ハ東京へも御出懸相成候様致度候。

3. 続・北京③ [1899年] 12月7日付書簡

先月二十四日付手紙拝見。為替券正に請取申候。色々多用のところ却て心配をかけ、御氣之毒に存じ候。此だけにて跡ハ大抵差支無之候間、富山房より参り候とも、別に御送りにハ不及候。当地ハ誠に意外ニ錢の大要るところにて、始めの予算とハ大ニ相違致候。然し大体容子分り候間、今後ハ今までの如きことハ無之と存じ候。

昨今餘程寒く相成り、街上日当りの悪き処ハ氷張り居候。海河も近々凍るべく、只今にてハ猶上海より日本汽船通ひ居候が、最早両三日にて止み、跡ハ郵便物のみ山海関廻りにて来るべく候。然し天氣ハ毎日快晴にて、東京の如き曇天無之、誠に心地よく候。昨日ハ強風土沙を飛し、天色為めに黄色と相成候が、是所謂朔風にて、蒙古地方より吹き来るものと申し候。風の出る前日ハ夫振天少しく曇り候、風出れば二日位ハ吹き、跡ハ又快晴に相成候。

七島生も近藤氏方に参り候よし、短日且試験も近き候ゆえ、其方便利と存じ候。但留守宅幾分か寂しく相成候ことと存じ候。

諸方何も変り無之候也。今便ハ右の請取のみ申陳候。匆匆。

十二月七日朝

宇之吉

繁子殿

4. 続・北京④ [1900年] 2月5日付書簡 封筒付

(封筒)

(表) 「大日本郵政」切手1枚 (もう一枚は切り取られている)

[日] 本東京府荏原郡大崎村字下大崎 / [三] 百六番地 / 服部繁子殿 / Tokyo, Japan

(裏) 清国北京日本公使館 / 服部字之吉 / 「上海・SHINGHAI・26 FEB」(消印)

(墨で書き込み: 「歌についての事」)

(本文)

新年の賀状到達披見致候。御両親様御機嫌良く御報歳被遊候よし、何寄御悦ばしく存じ候。子供も元気のよし、安心致候。田舎のことについて来客も少きよし、唯寂しきことと存じ候。御父上様東京への御年賀ハ遠路にて、御苦勞多きことと存じ候。定めて東京に御出でにても門々多く御忙わしかりしことと存じ候。新年早々雪有之候よし、田舎にてハ何ほどか路悪しきことと存じ候。先日の手紙にてハ其内五反田にステーション出来るよし、左様相成候はば、大に便利と可相成候が、何れ一、両年後のことならばと存じ候。

岡正一氏先日着京の処、途中手違ひにて荷物後れたる旨断有之。漸く昨日届け呉れ候。早速披封候処、羽織其他心入りの品正に請取申し候。手紙も正に請取候。石井、中川両夫人への物も請取申し候付、皆送るべく候。石井夫人ハ二三日前流産三月位の処、出血甚しく且熱を催し候。今日ハ産褥熱と診定され、石井君大心配に候。西公使の長男十六才急病にて東京にて死し候たるよし。公使夫婦ハ大に力を落し居られ、気の毒に候。公使ハ五十以上にて子供ハ右長男の外にハ当才の女子のみのよし。殆ど一粒種と同じことゆえ、実に気の毒に候。此に付けても信の事思ひ出し候ば、猶々公使の心中察し申し候。

川田氏に宛て候書物も請取られ候よし。其の中『周易述』だけハ根本先生の

分にて、他の小唐本ハ中川正信氏の分なり。中川氏ハ京華学校の教員ゆえ、七島に頼まれ可然候。

和田雄治氏より手紙あり候よし、承知致し候。本田種竹氏ハ本月二十日上海発の船にて帰朝の途に上る旨今日通知あり、帰朝の上ハ尋ねると兼ねて申し居候間、其内尋ね行くべく存じ候。日本ハベスト今猶盛の容子、然し東京にハ入らぬ容子ゆえ、安心に候。当地ハ先日来ジフテリア流行にて、小兒太分死し候。支那医者にてハ此の病ハ到底手の付け様無きことに候、天然痘も絶えず有之候。支那人ハ今猶種痘を好まぬゆえ、麻子マーズ（アバタのこと）多く見懸け候。中々の美人が麻子の為めアタラ容顔を損じ居候ハ、気の毒に候。当地気候昨今餘程暖くハ相成候が、此三四日ハ毎日風吹き日中にてても寒暖計華氏三十度に上らず、朝夕ハ大抵十五六度に候。然し昨日立春ゆえ、此よりハ大分宜しからむと存じ候。冬至より八十一日目に至れば、犬が日向の熱を避けて日蔭に臥すと申し居り候へば、三月中旬にハ餘程暖くなることと存じ候。当地に来てより用心の為め、シャツ、モモ引を絶えず用為居り候ゆえか、幸に一二度風邪のことあり候のみにて、至て丈夫に有之。例の喉頭の腫れハ一度も無之候。昨年より本年にかけて雪ハ近年に無き多量にて、随て寒氣烈発、多分今春より夏にかけて病氣少からむと経験家申し居候間、是ハ第一の幸と存じ候。

年末の容子ハ先便記し置候が、年始の容子大略記し申し候。

元旦未明早起ハ大晦日の夜十時頃より始まり候まで爆竹盛なる。此ハ大小あれど大にて長四五寸、太サ〇位にて中に火薬を入れたるものなり。此ハ魔を除き邪を驅るといひて、毎戸之を放ち候。其音中々強し、大なるよしのハ鉄砲の音位あり。毎戸にてなすことゆえ、除夕は夜中ポツポツドンドンにて喧しく夜明頃に止み候。元旦ハ早朝子一ンガオ年糕（餅なり、但粉餅なり）を食ひ、酒を飲み候ハ、大略日本と同じ。但し屠蘇ハ無し候。普通の酒なり。其れより主人ハ親戚朋友などの処に年賀を為す。婦人ハ正月元日より五日までハ他人の家に行くことを得ず（之を忌門といふ）故に、又切れ物を一切用為ること得ず故に、何も用無ければ家の内にてカ

ルタなどして遊ぶ。但元日に東岳廟（人死されば其鬼泰山に行く信じ、泰山の神を祭りしものを東岳廟といふ）、土地廟（地藏サマなり）などに参詣し、運命を祈る。此ハ中々盛なり。婦人も之に参詣することハ許さる候ゆえ、婦人中々多し候。二日ハ財神（日本の大黒サマの類なり。之を祭れば金銭に富むといひ大に信仰す）を祭る。此日ハ朝より夕方まで又爆竹盛なり。商店ハ皆門戸を閉ち候ゆえ、往来にハ年始客の外ハ歩行く人無く候が、商店の番頭どもハ家の内にて鐘、鑼どら、大鼓など叩きて騒ぎ居り候ゆえ、外は割に寂しきも家の中ハ賑はしく候。家々ハ唯門の両側に紅唐紙の聯を新しく、門の扉に門神の像を新しくし、門を出で、突き当りの壁（此ハ他人の家の壁也）に紅唐紙に「出門見喜」の四字を書きて張りあるのみゆえ、到る処赤きものハ多きも日本の門松を見馴れたる目にハ中々物寂しく感じ候。六日は小商店の商売始めにて、大店ハ此の日より十七日又ハ十九日、二十日迄ハ午前だけ店を開き、午後ハ閉ち候。然し兎に角商売始めの日ゆえ、此日の朝ハ各商店又爆竹を放ち候。又此日より婦人ハ他人の家に行くこと出来候ゆえ、段々女の年始が始まり申すべく候。此日以後の様子ハ次便に記すべく候。

濱尾様には先日祝ひの手紙出し置候。外山様御病気の容子御知らせにて承知仕り候。早速見舞状差上ぐべく候。

当地にハ風俗を見るべき写真無之支那人ハ写真を嫌ふもの少からず、殊に婦人ハ猶甚し候、正月婦人が其房に張る絵を少し買ひ候ゆえ、一二枚同封にて送り申し候。然し此の絵ハ漢人の婦人にて満州婦人にあらず、且南方の風俗にて北京風にハ無之候。満州婦人ハ足大きく衣服長し、漢人は足小さく、衣服ハ上衣ハ普通なるも裳ハ裙子といひて褶ヒダの多きものを腰に巻き候。頭髮も漢人のハ違ひ候。（【行間での補足】頭に冠れるものハ招君套といふものなり、上等の人ハ珍珠などを以て飾る冬の冠りものに候。）紅粉の付け方などハ此絵にて分るべく候。此絵ハ破れ易きゆえ、御閑の時御父上様に裏打でも頼候はばよろしからむ。

淑ハ金六の娘の真似して本を読み候よし、女のことゆえ格別の害ハ無きも強て

教えぬ方よろし候。今の内ハ自然に任せ置くべく候。ヲトナシクシテ居る様申し
され度候。續時々喘息のよし困りたることに候。此ハ親譲りゆえ致方無之候。

先ハ右申すのみ。匆匆。

二月五日夜即支那正月六日

宇之吉

繁子殿

御両親様へハ此度ハ呈書不致候間よろしく申上げられ度候。

大抵の物ハ当地にて弁じ、食物も不自由無之候間、必要の時ハ此方より申入
候ニ付、其外ハ御送りに及ばず候。北京に無きものハ天津に頼みば此処にハ日
本品ハ中々多く候、慣れれば段々不便ハ無くなり行き候。

岡氏に頼まれ候荷物延着の爲め、其表の様子知れず、先日容子聞合せの手紙
出し置候次第に候。岡氏途中手間取り候よしにて、着京案外に後れ候。

5. 続・北京⑤ [1900年] 2月11日付書簡 (附：島田重礼夫婦宛書簡)

お手紙御両親様へ差上られ度候²⁸。

一月九日、十三日、二十二日、二月七日に手紙差出置候間、始めの三通ハ落
手のことと存じ候。今日鈞様の手紙到着。新年になりて当方の手紙届かず、
御両親様始め御心配のよし申越され候。此ハ十二月十五日に手紙差出候後、彼
是にて一月九日迄手紙出さざり候ゆえにて、御心配相懸け恐縮に候。当方にて
ハ、其表の手紙来らずとて心配し候。其表にてハ同様当方を案じ候次第、遠方
ゆえ致方無之候。十二月より一月迄手紙出さざりしハ、別に仔細あるにあらず
少し風邪のこともあり、又正月ハ年始にて四五日費したる等の爲め、延引相成候
次第に候。御両親様へも宜しく申上げられ度候。

今日麻布御邸より大奥様御逝去の報あり、驚き申し候。就てハ香奠の事もあ

²⁸ この1行は本書簡の最初に、本文の右の餘白に小さい文字で書き加えたものである。

るべく候二付、釣一様より御頼みあり候。書籍代の前金として拾円だけ立替を頼候間、此手紙と共に釣一様より御届け被下候ことと存じ候。

金沢夫人より先日年始状来り候間、序に宜しく申され度候。水野夫婦云々、当地にてハ御心配ニ及ばず候。公使館本館にてハ花合せなど流行候も当方ハ何も無之。又自分ハ右類ハ知らず、婦人の方も当地ハ概して外国人を鬼か何かの如く思ひ居り、路を行きて年若き婦人に出逢ふと、先方より急に路を転じて避け候程にて、女にノロケル機会ハ何人にも無之。且自分ハノロケルべき身にハ無之、(右様に気楽にあらざるゆえ)御安心有之度候。朝ハ大抵八時に起き、夜ハ十二時少し過ぎまで読書致居候。書物の餘り買えぬハ閉口に候。然し日本に居ると違ひ、別に用無きゆえ、読書時間多く、此ハ結構に候。時々散歩も致候居り候。今便ハ右のみ申陳候。匆匆。

二月十一日紀元節の夜

宇之吉

繁子殿

今日ハ午後三時間ほど運動し、大分気分宜しく候。

(島田重礼夫婦宛書簡)

御年始状難有拝見仕候。御機嫌良く被為在乍蔭安心仕候。新年ハ処々御廻りにて御骨折のことと奉存じ候。十二月以来時々天気悪しく候よし。別して年礼に候御困りと奉存じ候。矢野氏にも御出相成候よし、当地の容子ハよく御分りに相成候ことと存じ候。当地昨今ハ餘程暖気にて、今日などハ外を歩行き候てハ少し熱き位に御座候。昨年より本年迄当地例年に無く雪多く、寒も烈しかり候ゆえ、春夏ハ病氣少からむと申し居り候。此ハ私の為めにハ最も好都合に御座候。至て丈夫ニ御座候間、御安心被下度候。当地歳末新年の容子ハ先便認め差出置候間、御覧被下度候。

御手紙と共に丹羽家より大御奥様御逝去の通報有之驚き入候。近来御丈夫な

り候ゆえ、今頃右様の事ハ無之かるべしと存じ居候ニ、実に意外にて驚き入候。早速手紙ハ差上申し候へども、猶宜しく御悔願上候。御香奠等ハ可然繁に御申し聞被下度、又右ニ就きてハ定めて毎日御手伝にて御骨折のことと存じ候。

何卒御身体御大切に相成度、其のみ念じ居候。私ハ今分にてハ何の病氣も無かるべく候間、御安心願上候。

二本松へ夫々御心付けのことハ御気の毒様に存じ候。

先ハ右のみ申上度如斯御座候。頓首。

二月十一日紀元節の夜

宇之吉

御両親様

6. 続・北京⑥ [1900年2月] 18日付書簡

〈前欠〉非常に心配かけたるハ返す返す気の毒と存候。淑子まで心配させ候ほどにてハお身の心配ハ目ニ見る如くに候。今後ハ決して右様の事無きやうすべし候。殊に病中大に心配をかけたるも猶々気の毒に候。此頃ハ全快のことと存候が、猶十分養生され度、御互に病氣のみ一番氣に懸り候ゆえ、成るだけ無理無きやう致度候。

見し其人云々他人かましくと御怨み有之候が、右ハ自分の歌の詞のあしきゆえにて、見しとハ上旬の夢^〇をうけて当夜夢に見し、我妹子の意味に候。怨まれてハ困り候。中々他人かましき心ハ無之候。

金の事ハ先便申し候通り、誤解にて失望致候。

今月ハ先日鈞様に願ひ候十円の外ハ送金六ヶ數候。日本新聞の方にて都合付けられ度、四月に学資来る時ハ送金致すべく候。

年始状の外ニ、一月十三日、二十二日、二月七日、同十二日各一通差出置候。二月十二日のハ台町へ同封にて差出候。

亡信児の行状認め候が、草稿のままゆえ、清書して次回に送るべく候。天王

寺の方はまだ分らず候や。三好君より時々雑誌など贈られ候間、面会の時にハ宜しく頼み入候。

橋口氏届物落手のよし、安心致候。矢野氏にも御出でのよし、当地の容子ハ御分かりと存じ候。

先ハ右まで。呉々も身体大事になされ度存じ候。先日の手袋等早速用為居候。当分別に入用のものハ無之候が、狩野氏来渡の時に単物一二枚頼まれ度候。当地ハ水悪しきゆえ、良き品ハ直ぐに痛み候間、有り合ひのものの内悪しき方にてよろしく候。其他別に買ひ求めて送らるるに不及候。

台町と牛込とへハ同時に礼を差出置候。匆匆。

十八日夜半

宇之吉

7. 続・北京⑦ [1900年] 4月6日付書簡 封筒付

(封筒)

(表) (切手は切り取られている)

日本東京府荏原郡大崎村／字下大崎三百六番地／服部繁子殿／Tokyo, Japan

(裏) 清国北京日本公使館／服部宇之吉

(消印) 「上海／SHANGHAI／12 APR」 「武藏／(以下不明)」

(本文)

二月二十三日出の手紙只今落手致候。先以て皆々様御無事安心仕候。自分も無事に候間、御安心願候。

三月六日、十二日、二十八日に手紙差出置候が、未だ何れも届かず候や。若し右が届かぬときには同時に安井様へも日本新聞原稿入りにて三通差出したることゆえ、此も届かぬことに相成りてハ、更に書いて送らねばならぬ次第ゆえ、此手紙御覧次第、右三月六日、十二日、二十八日分の手紙の着否端書にてよろしく候間、御知らせ有之度候 (端書ハ万国聯合郵便端書有之候)。

外山様御容子委しく相分かり、実に残念にもあり、御家族の御心中御察し候申し候。先日御悔状差出置候。法貴、坂井の婚姻ハ無滞相済み候ことと存じ候。

先月三十一日東京丸座礁したるよし。天津領事館より当公使館に通知有之候ゆえ、狩野君乗組み居られずやと心配致し候処、漸く乗り居らぬこと分かり、安心致候。右船にて参謀本部附の軍人二名只今当館に着候ゆえ、段々容子を承り候へば、乗客二名死したるよし。右軍人も一時は全く死を決したるに、幸にして助かり候と申され候。中々危きことに候。

翰殿のことハ大凡見込出来候が、愈確に分かり候上、委しく申し送るべく候。

当地ハ花の一向無きところにて、今日頃ハ杏、桃の花開き候が、此も中々容易に眼に付かず、其他ハ青芽の出たるハ柳のみに候。海棠ハ少しハあるよしなれど、餘程金銭の裕なる家ならでハ無之、先づ花ハ見られぬと申してよろしく候。

狩野君より只今手紙来り候、今月中旬に来京の予定と申し候。同君来京に相成候はば、御地容子委しく知れ可申し候楽み居候。

御地ハ桜も開き候ことと毎日同宿の人々と噂致居候。

御手紙に当方の手紙一向届かぬやう記候あり候ゆえ、右日本新聞の原稿のことも有之、不取敢右のみ申陳候。餘事ハ次便に不日可申陳候。御両親様へ宜敷願上候。

台町御母上様兎角御不快勝のよし、折角御大切に相成候やう願候。

先ハ右のみ、匆匆不乙。

四月六日

宇之吉

繁子殿

8、続・北京⑧ [1900年] 4月17日付書簡 封筒付

(封筒)

(表)「大日本帝国郵便」切手3枚 「SHANGHAI・(以下不明)」(消印)

Madame S. Hattori. / Tokyo, Japan / 日本東京府荏原郡 / 大崎村字下大崎三

〇六 / 服部繁子殿

α 五四三

(裏) 清国北京日本公使館 / 服部宇之吉

「上海 / SHANGHAI / 25 APR」 「武藏 / 東京 / 卅三年五月 / 四日 / ハ便」

(消印)

(本文)

去十二日にも一封差出置候間、此より先に御覽と存じ候。狩の君昨日当地着、其表の容子委細承り、安心致候。御遣し候の品々正に相届き、御心入りの程悦居候。台町及安井両家よりの品も夫々難有頂戴致候。御手紙も持見致候。昨日今日ハ狩の君の迎及び世話にて終日多忙に候。

為替券にて三十円封中差出し候間、請取られ度候。

右狩の君にて多忙ゆえ、不取敢右請取の御報と為替の事のみ申陳候。餘ハ次便可申送候。乍末御両親様へよろしく申上げ度候。匆匆。

十七日夜 服部宇之吉

繁子殿

為替ハ正金銀行東京支店に候。

9. 続・北京⑨ [1900年] 5月9日付書簡

御父上様の御手紙拝見仕り、又お身の手紙も披見致候。先以て御両親様御始じめ皆々御無事安心致候。自分無事安心有之度候。

御父上様家の系図御記し御送り被下、拝見仕候。御母上様麻布へ御手伝として御出向被成候よし、御苦労様と存じ候。子供も皆丈夫のよし、安心致候。

自分先便申置候通り、先月二十七日出発し、明の十三陵及び長城を見物し、三十日帰京致候。同行者ハ当館内にて二人、館外より一人、自分とも四人に候。狩野君ハ来着早々足を痛め候ゆえ、同行致さず候。明の十三陵ハ写真にて

ハ度々見居り候が、実地を見れば、兎も角大なるものにて、中々日本の山陵の比に無之候。長城ハ秦始皇の築き候ものと違ふ分に候が、峻嶺の上に建てられ候ものにて、中々壯観に候。但今日にてハ大分破損致居候。長城に至り候時ハ朔風黄土を捲き来りて、四方漠々、塞外の容子ハ少しも見えず、唯何と無く故地に入り候かの感有之候。

十三陵の手前に湯山といふ処あり、康熙帝の幸せられ候温泉場が今猶存じ居候。其庭前に藤の花咲居り候ゆえ、一房取り来候ニ付き、差出候。途中三泊、始めて支那宿に泊り、成るほど支那旅行ハ面倒といふことを感じ候。三夜とも床虫に食はれ、頸、手、足数処腫れ候が今日頃ハ漸く愈え候。初めての旅行にて大分益を得候。

台湾無事のよし安心致し候。横江様病氣と承り候が、何か申し来居り候や。東京、二本松とも皆々御無事、安心致居り候。

先日濱尾様御夫婦御入来のよし、難有ことに候。自分より御礼可申上候。

法貴、坂井婚儀の容子委しく相知れ、安心致候。すゑ子よりハ手紙来候が、法貴ハ卒業、就職の報知も何もよこさず、婚礼の礼状も無論よこさず候。序に一言戒められ度候。

皇太子殿下御婚儀明日御挙行のよし、貴地ハ別して賑しからむと想像致候。当地にてハ当館にて祝賀会を行ふことに相成り、今日ハ準備にて色々忙しく候。

御地の花色々珍しく懐かしく見候。当館の柳昨今柳絮を飛ばし居り候が、右ハ全く綿と同じものにて日本にてハ餘り見ざりしものゆえ、封中少し入置候。其他見るべき花ハ無之候。花ハ故郷に限り候ことに候。

森中佐の事先便申送置候が、何れ数日内にハ東京に着すべく存じ候。

日本新聞原稿今便も少々送り置候。

明日の準備にて忙しきゆえ、当用のみ申陳候。御両親様へハ次便にて御返事可申上候間、宜敷申上げ被下べく候。匆匆。

五月九日夜十一時半

服部字之吉

繁子殿

10, 続・北京〔附録 1〕明治 33 年（1900 年）5 月 31 日付領収書 1 枚 封筒 1 通

① [1900 年] 5 月 31 日付領収書

Department of Communications

Receipt No.41

Jidarnachi office

31/5 Month 33 Year of Meiji

Received from *Kan Shimada*

The Sum of *11yen* for the

Ohage of Telegram

No 10 Addressed *Hattori*

Peking

Clark in Charge

② [1900 年] 6 月 6 日着消印封筒 1 通

(表) 「大日本帝国郵便」切手 1 枚 「(残) / PEI 22 M (残)」(消印)

日本東京府荏原郡大崎村 / 字下大崎三百六番地 / 服部繁子殿

Mrs. Hattori, Tokyo, Japan.

(裏) 清国北京公使館 / 服部字之吉

「上海 / SHANGHAI / 28 MAY (不明)」 「武藏 / 東京 / 卅三年六月 / 六日・

□便」(消印)

二、ドイツ発書簡5通、葉書1枚

1、続・独① [1901年] 1月22日付書簡（同日付別紙1枚、封筒書き方1枚）

封筒付

（封筒）

（表）切手2枚 「BERLIN.N.W（以下不明）／23.1 01 11（以下不明）」（消印）

An / Frau Hattori / Tokyo, Japan. 「東京／4-2-28／后2 5/6」（消印）

日本東京府荏原郡大埼村／字下大埼三〇六／服部繁子殿

（裏）文字なし

（本文）

第十七八号明治三十四年一月二十二日独逸国伯林府にて

番号相違候やも知れず候が、詰まり神戸より二、香港より二、新嘉坡より二、ペナンより二、コロンボより二、スエスより一、ポートサイドより二、仏国マルセイユより三、仏国パリより一、合計十七通、内端書封書中に封入し九通ハ出し置きたる筈に候²⁹。

パリより端書にて申入置候通り、二十日夜九時二十五分發汽車にて同処發、二十一日午前五時少し過ぎ仏国と独逸国との境なるエルバスタに着。同処にて独逸税関官吏より手荷物の検査を受け終わり、直ぐ乗車し候。独国ケルンに着。同処にて汽車乗替への為め暫時休息、更に午前八時二十九分同処發の汽車に乗り、午後五時五十四分当地ポツダム・ステーションに着致候。仏国より当地の呉秀三氏に打電し置候処、同氏ハ先日他ニ転学されたる為め、同氏転学先に届き、それより同氏ハ更に当地の友人ニ打電し呉れ候よしにて、ステーションに芳賀賀一、福原繚吉の両君出迎ひ被下、大いに都合よろしく、それより直に両君の案内にて当地の下宿処に宿を借り、夕食を済まし候。当地滞在中なる文部省の岡田、正木二氏その他友人を訪ひ、寝に就き申候。

²⁹ 本書簡の最初に、本文の右の餘白に書き加えたものである。

仏国の汽車ハ稍粗末なりしが、独逸の中中々立派にて中等にても日本のよりハよく候。但何時も乗客多かり候為め、夜中も横臥するを得ず、三十九日夜半より昨夜当地着までハ先づ碌に睡らずして来候為め、昨夜ハ少し疲れ、今朝九時頃まで睡り申し候。今日ハ氣力快復致候。仏独国とも汽車ハ日本のよりハ速度大なるゆえ、進行中ハ中々よく揺れ、一寸立てても直ぐ横に倒れんとするやうにて随て距離の遠きにかかわらず、マルセイユより当地まで二昼夜足らずにて四十一時着し候。

マルセイユハ東京よりハ餘程暖なりしが、それより当地まで漸く北に向ひパリまでハ先づ直北に向ひ、パリより当地へハ東に向ひ候に随ひ寒氣強く、段々田野に雪多く見え、川に薄氷も見え候が、当地ハ昨今ハ少し暖きよしなるが、東京より暖に候。

途中多く雨に遇ひ、殊に急行汽車なりしゆえ、何処も見物せず来り候、当地も一寸見物してもよろしく候が、何れその内にハ再び来る積ゆえ、先づ見物ハ見合せに致すべく存じ候。文部省の富岡氏等明日ライブチヒに行く筈ゆえ、幸ひ好き道連れゆえ、同行せんと存じ候、同処までハ三四時間のことゆえ、此ハ楽に候。

今朝寢床より頭を挙げて窓外を見たるに、天未だ暗きゆえ、早きことと存じ、一寸時計を見たるに、八時過ぎなり候ゆえ、起き出でし、顔を洗ひなどしたるに、九時になりても猶暗く、家人ハ灯を点じて、料理など始め居候。十時頃になりて漸く東京の昨今の節の七時過ぎ頃の明さに相成候。此れにてハ独逸人が朝寢坊なるハ無理ならぬことと存じ候。詰り北により居候ゆえ、夜の明け方遅く、日の暮れ方早き訳に候。

一寸市中歩行き見ても中々賑しく、家ハ大きく高きゆえ、中々立派に候。

今日ハ公使始め、その他の人にも面会致さむと存じ候。

委細ハ明日ライブチヒに落付き候上にて更に申送るべく、今ハ唯途中のことのみ申入候。匆匆。

一月二十二日 宇之吉

繁子殿

(別紙 1 枚)

前略。御両親様益御清康奉賀候。お許も小兒も壮健の事と安心致居候。三十九日夜半^{即二十日の}_{午前の時差}より昨夜まで直行の汽車に乗り、昨夜無事当地着いたし候。明日ライブチヒに行く積に候。途中の事前紙に記し置き候。

先ハ右のみ。匆匆。

一月二十二日

宇之吉

繁子殿

[附]

封皮見本として一枚送り候。街名ハ Wächterstrasse にて Strasse は英語の Street^街に同じ、通例は語尾を略して書き候ゆえ、右街名は Wächterstr. だけにて分かり候。但電報などにハ正しく書き候を常といたし候。

此方より送る手紙の封皮にハ

Frau S. Hattori

と書き候。その Frau^{フラウ}ハ英語の Mrs と同じ意に候。

2, 続・独② [1901 年] 9 月 14 日付書簡 封筒付

(封筒)

(表) Via Amerika! 切手 2 枚 「LEIPZIG・14.9.014-5N・31」(消印)

An / Frau Prof. S. Hattori

Tokyo, Japan

東京府荏原郡大崎村 / 字下大崎三〇六 / 服部繁子殿

(裏) Abs. Prof. U. Hattori / Leipzig, Deutschland³⁰ / 十月廿一日夕

(本文)

御手紙にて容子相知れ安心いたし候。小児の病身ハ困り候が、此も致方無之候。万事に付けそこ許の身体大事に被成度、日夜念じ居候。

台町別状無之よし、御母様先日御岳御参詣あり候由、安井さまの手紙にて承知いたし候。何卒万事好都合ニ運び候やうと祈居候。

日本新聞今までに三十四円送り来候よし、自分の考にてハ猶ほ多くある積りに候が、或ハ一回分二円に下落したるにハ無之候や。餘り報酬が少いやうで力が落ち候。然し今度ハよき材料見付かり候ゆえ、段々送り可申し候が、一応念の爲め、通信料一回分何程の割なるかを安井さまに聞合せられ度候。

富山房ハ勘定不致候や。

ベルリンにて芳賀君の下宿して居る家ハ主人ハ会社員か何かで相応に暮し居るよしなるが、女房ハ十数年前より姦夫を拵え、然かもそれが亭主殿の許可を得たるもので、十数年間毎日曜日にハ来て、亭主殿をはじめ家内中打揃ひ食事を共にするよし。先日家内中にて海水浴に行くとき、女房ハ此の男と一緒に行き、亭主殿ハロシアの方など旅行して後から行くといふ話なり候よし。此種の姦夫ハ家ノ友達ト称して、公然誰にでも紹介すといふ。此れにても当国の風俗の乱れたるハ分かり候。芳賀君ハ大ニ不快に感じ、此の男の来る日にハ外で食事を為し候、決して食卓を共にせず、そこで女房先に気にして色々云い訳けをするよし。噫、風俗の乱れたる実に厭ふべく候。

先ハ右のみ。匆匆。

九・十四

宇之吉

繁子殿

先日来来客見本あり、又僻が付き、タバコを喫し始め候。

³⁰ ドイツ語「ライプツィヒ、ドイツ」。

3, 続・独③ [1901年] 10月30日付書簡

九月二十三日附細書披見。下賜金処理の事ニ付、深く心労気之毒ニ存候。昨年留守中家を作るべからずといひ候と今度の下賜金の事とハ自から事情違ひ候ゆえ、自分何も異存無之。唯一方に借金をしながら、一方にて田地を買ふといふハ少し妙に聞え候が、借金の事ニ付き、終始御心配被下台町にて御異存無きのみか、大に御賛成被下との事ならば、田地買入れ自分ハ異存ハ少しも無し、遠慮無之の實行し候宜しく候。

何や角にて大分借金出来候こと、釣一様よりハ今度詳細御申し越被下、承知仕り、心配致居候。何分自分手許も一盃にて人様のやうに旅行もせぬが、それでキチキチ一杯の事ゆえ、自分手許より送金の都合に至り兼ね候。新聞も一向金子ならぬやうにて、何か別に工夫をせねばならずと存候が、差当り一寸名案も無之、困り居候。自分帰朝まで何とか持ちコタエラルべきや、甚だ愚念致居候。若し持ち堪える見込無しとせば、断然考案を廻らさねばならぬ次第ゆえ、その辺り次便に申越され度、借金の出来るハ宜しきも、借金する途が無くなるやうになりてハそれこそ進退維れ谷まる訳ゆえ、その辺よく考えねばならずと存じ候間、将来の見込次便に申越され度候。

翰殿今以て未決のよし、心配致居候。

三丁目ハ如何なる容子に候や。次便報知頼み入り候。

色々の苦勞をかけ、気之毒ニ存居候。自分も当地にてハ唯勉強一方にて、芝居も見ず、此の頃ハ運動散歩の外にハ何も別に慰みも無之候。河合君も同然に候。ツマリ日本に居るよりハ読書の時間多きのみにて、他にハ何も益無之候。而し身体の方ハ十分注意いたし居候間、安心あるべし候。磯田君などが独逸が面白いといひ候ハ、甚だ了解に苦しみ候。

先ハ右のみ。匆匆。

十月三十日

宇之吉

繁子殿

4, 続・独④ [1902年] 4月30日付絵葉書 服部淑子宛

(表) 御機嫌よろしう 四月三十日

ベルリンにてマルガレツテビルンバウム / Marg Birnbaum

この児ハ小生下宿の家の娘にて十三才になる。(図3 淑子宛絵葉書)



図3 淑子宛絵葉書(表)

(裏) Via Amerika !

An Fräulein S. Hattori / 東京府下荏原郡大崎村字下大崎 / 三〇六 / 服部淑子殿

in Tokyo, Japan

5, 続・独⑤ [1902年] 6月17日付書簡 封筒付

(封筒)

(表) Eingeschieben³¹!!! / Frau Prof. S. Hattori / Tokyo, Japan

東京府荏原郡大崎村 / 字下大崎三〇六 / 服部繁子殿

切手2枚 「(欠) / 18.6.02.11.12V・21a」, 「BERLIN.N.W (以下不明) / 18.6.02.1112」(消印) 「Berlin 21 / Eingeschieben. / No.902 c [R] (ラベル)

(裏) Berlin, Deutschland³² / Stromstr, 10 aii³³ 「東京・35-7-24・前4」(消印)

³¹ ドイツ語「書留」。

(本文)

前略。今回又意外なる変化を自分身分の上に生じ来り候。即昨日十六日当地日本帝国公使より急使を以て文部大丞より来電の趣により至急面談したきニ付、出頭あり度とのことゆえ、直に出頭致候間、文部大丞より

清国政府より北京大学堂師範科教頭招聘の申込みあり、任期ハ三ヶ年、俸給ハ一ヶ月五百円、別に官舎を給す。九月始めに北京ニ着すべし。別に助教授をも雇ひ入る見込。東京帝国大学総長も異存無きニ付、貴官の此任に当らればことを望む。返事ハ電報にてすべし。

との電報あり、公使も承諾さる候ことを望むと申され候。今頃此かることを聞くべしと予想すべき筈も無之、一驚を喫し候。兎も角明日御返事申すべしとして、昨日ハ引取申し候。先づ第一に此事ハ自分に取りてハ支那の事を研究する好機会を与え、且兼ねて支那に於ける教育の権を日本人の手に握るべしと主張したることもあるゆえ、自分一人の上よりハ一の快事として引受くるを辞せず。然るに第二に、今回の事ハ留学と異なり候ゆえ、種々の点より家族引纏め赴任を要すべきも、御両親様外国に御出でに相成ることに付て如何に御考え可相成欤と、此点に於て大に心配致候。何分自分一人でも決し兼ね、昨日午後急にライプチヒに出向き、河合君とも相談致候が、同君も御両親様北京行格別御異存も無かるべし、承諾され可然との説に有之、依て承諾の事に決し候。今朝帰府の上、公使に返事を致し候。即左の通り公使を經り文部大丞に答え候。

承諾すること。助教授の選定に関してハ自分の意見を提出する餘地を存す

³² ドイツ語「ベルリン、ドイツ」。

³³ ドイツ語「シュトローム通り、10のaの2」。

ること。最も近き便船にて一旦帰朝すべきこと。

何分遠方のことにて相談の運びに至り兼ね、右の通り決し候段、御両親様によるしく申上げ被下度候。

就て今月末か来月始めの日本郵便会社便にて帰朝の途に上り可申、神戸着に八月中旬過ぎと存候。九月始めに東京出発といふことにも立ち至り兼ね可申。多少ハ後れ可申候が、兎も角九月始め出発の用意を為さねばならずと存候
○その積りにて万事心据えあるべし候。唯々今猶最も心配致候ハ御両親様が進むで北京に御出でになるや否に候。官舎を給せらる候とせば、住居も相応手広なるべく、万事に御不自由ハさせ申さぬことハ勿論、日本ニ居るよりハ人にも尊敬され可申。多少珍しき処も御覧が出来、気候も寒暑とも御老人様に強て外出の必要無きゆえ、寒き時と熱きとハ家の内にて夫々之を凌ぐ用意も出来候ことゆえ、凌ぎ難きことハ無之と存候。航海も神戸より天津まで約一週間、天津北京間ハ半日ゆえ、日本の北海道辺ニ行くと格別の事無く、北京の方北海道よりハ遙に楽みも有之と存じ候。今ハ各国の駐在兵も在り、先年の如き事變の起るべき筈も無之、危きことも少しと存候。御見物の御積りにて進むで御出かけ被下候やうならば自分に誠に安心可致。唯その点のみ今猶心配致居候。御相談の出来ざる為め、非常に御苦みを与え候ゆえ、相成りてハ不相濟と心配致居候。その辺よく申上げ被下度候。御身ハ清国行にハ勿論異存無きことと存じ候。小児教育の事も考え候が、淑の学校の方三年位後れた処で、此ハ格別のこと無之。續ハ勿論学校の方の關係も遠きことゆえ、此ハ何も心配無之。唯御両親様のこののみ心配致居候。その為め態々河合君にも相談に行き候次第に候。

赴任するにしてハ支度ハ中々面倒と存候。今差当り思ひ付きの条々のみ左に記し候。

一、女一人探すこと。此ハ普通の下女でハ困り候。多少小児の保育に任ずること得べきもの、即教育あるものを要す。裁縫の出来ることも必要の条件と

存候。何れ少しハ支那語も覚えねばならぬことゆえ旁多少教育あり知識あるものを要す。

此ハ相當の月給を給すること、且三ヶ年間の約束にて極めること、尋常師範学校卒業生などハ最も妙と存候。法貴末子に相談して、兎も角然るべきもの一人極めること。

その外普通の下女ハ一人連れ行く方便利ハ便利に候が、此ハ書生を一人連れ行く方却てよきかとも存候。自分ハ書生の方をよしと存候が、御両親様、鈞一様、安井様とも相談の上、最も便利の方何れにても一人取極め可然。人物の選定も御身に任せ候。但書生ならば、中学卒業若しくハ之と同等の学業あり、年齢ハ二十才位^{多少の前後}_{ハ差支無之}と存候。書生にハ衣服等を給し候。支那語を学ばする位を条件とし、別に月給を要せざること。

二、蒲団類ハ表側だけ持参、綿ハ北京にて買ひて入れること。

来客用として二、三人分ハ餘分に用意すること。差当りの入用もあるべきに付、小夜着などに綿の入りしもの数個持ち行くも可ならむ。

蚊帳ハ最も必要ゆえ、数個持参の事。

三、衣服ハ餘り洗ひ晒し候のものハ用為られぬゆえ、小奇麗のもののみ持ち行くこと。婦人の会などもあるべきゆえ、紋附類ハ皆持参すべし。自分のハ帰朝の上に付、服の用意をせねばならぬゆえ、和服ハ有合せの俣にて、格別の用意を要せず。

四、台所道具ハ陶器類破損し易きものハ持ち行かぬこと。その膳、椀類ハ^{客用}ともに持ち行くこと。煙草盒等ハ無用、但し桐の火鉢の類ハ二、三持ち行く方便利ならむ。

五、掛物、額等も幾個か持ち行くこと。

六、下駄類ハ多くハ入用無し候。殊に高足駄などハ最も不用に候。

七、足袋、手拭、雑巾等ハ入用なり。雑巾ハ今より下女をして、手明きの際段々作らしむべし。

八、塵紙、当用葉、小兒玩具等々心付き次第用意すべし。

九、小兒（淑）用学校用具^{書物等}ハ買ひて持ち行くべし。

十、鯉節、椎茸、干瓢、湯婆等長く持ちて、目方も易からぬものハ数ヶ月分を買ひ入れ持ち行くこと。

長持、筆筒の類ハ持ち行くこと不便ゆえ、衣服類ハ別に入れ物を工夫すること必要と存候。

今思ひ付きたる必要の個条だけ右に記し候。書物ハ洋書の一部の外ハ先づ皆残し置く積りに候。留守中此れ等荷物の保管方も取極め置くべし。

御母上様及び御身とも北京にて外出の時ハ日本服ならば股引か、若しくハ西洋婦人のする如き長靴、足袋を要し候。御父上様ハ袴を用ゐるべし。此も別に必ず用意すべし。

新に買ひ入る候べきものハ自分帰朝の上にてよろしからむ。有合ひの物の取片付けハその前より為し置候べし。

今日倫敦日本郵船会社に便船問合せ置候間、返事あり次第出発の日を極め可申し候。此手紙の返事ハ最早当地にて請取れず候ゆえ、返事ハ香港か新嘉坡辺に出し置かるべく、それも便船の名分かり次第通信の書き方報知すべければ、それにより途中寄航の港に宛て返事を出すべし。

親類及び濱尾様、嘉納様等々ハ然るべし御身より通知を頼む。

取り急ぎ右のみ、匆匆。

六月十七日夜　ベルリンにて／字之吉

繁子殿

6、続・独⑥ [1902年] 6月21日付書簡 封筒付

(封筒)

(表) 切手2枚

An / Frau Prof. S. Hattori / Tokyo, Japan

東京府荏原郡大埼村／字下大埼三〇六／服部繁子殿

(裏)【上の行は残闕】Berlin, Stromstr, 10 [aii] 【「10」以下残闕、続・独⑤により補う】

Deutschland

(本文)

先便にて清国北京行の事申送り置候間、此の手紙より前に落手のことと存候。先日までハ再び印度洋を経て帰朝の見込みにて、先便申送置く候処、昨日文部省より電報にて米国經過帰朝差支無し候と申し来り。米国經過すれば、日数餘程早く相成候ゆえ、即米国經過の事に決定。今日直にロンドン郵船会社ニ宛て便船の事問合せ置く候。英国より米国を経て日本横浜着の日数約三十日間と存候。今月内に英国出発し得るとせば、遅くも八月二、三日頃にハ横浜に着すべし候。即

英国より米国ニューヨーク迄汽船 約七日間

ニューヨークより米国大陸横断してシアトルに達する直行汽車

約五日間

シアトルより横浜まで直行 約十五日間

計 二十九日

その外船と汽車との聯絡の都合にてニューヨーク及びシアトルに一夜ヅ、位宿泊すること要すべきも、その外折角米国を經過する以上ハ責めてニューヨークだけでも少々ハ見物致度と存候。それに一日か二日と見込み、彼是英国発より横浜発着までの間日数三十三、四日と存じ候。印度洋經過するに比すれば、少くも十四、五日ハ早く日本着の都合に候。米国シアトルより横浜迄ハ全く洋中の直行にて、何処にも寄航せず、随て通信の途も無之候が、ロンドンより返事あれば、米国シアトル出航の郵船会社船名と横浜着の予定の日とハ分かり候間、その上にて郵便なり電報なりにて之を報知すべく候。何れにしても八月始めに横浜着のことと存じ候。

九月出發まで一月計りの餘裕有之候へば、支度にハ大に都合よろしく候。万事の支度ハ自分歸るまで待つべし。家も大崎より毎日東京に出るハ不便にハ候へども、一月計りの間東京に家を借りるも徒に無益の費用を増すのみなれば矢張りその俣大崎に居り可然と存候。

書籍の儀、支那書ハ支那に持ち行くも愚の至り、而してドノ途支那にて又買はねばならぬゆえ、現在所持の支那書ハ或る部分を除くの外ハ大抵東京にて売却し、金にして支那に持ち行く方よきかと存じ候。売るとせばその売り方等ハ釣一様、安井様と御相談あるべし候。

先ハ右のみ匆匆申入候。不乙。

六月二十一日朝 宇之吉

繁子殿

三、アメリカ發書簡 5 通、葉書 2 枚

1、続・米① [1915 年 11 月] 20 日

十月廿一日、廿八附両信何れも落手。当方十月二日差出の分まで着すの旨にて安心いたし候。順子も快方のよし、安心致し候。御母上の御法事来年にして、二本松、川俣等に物を上げる由も承知いたし候。御墓參は何分頼み申し候。續も旅行より歸り候よし。續と基夫氏とは一向手紙を書かず續は出發後一回あり、基夫氏は其も無し候。先年も在外中矢末にて自分の事を筆マメと申し候が決して筆マメにては無之、矢張り勉強して書く場合多く候間、續も今より少し勉めて書くやう御申聞可相成候。淑子は已に五、六回も手紙を呉れ候。最近のに基夫氏気マりが悪くて書き悪い云々と断り有之、且役所の書き物にて忙しき由記しあり候。自分は別に悪くも何とも思ひ居らぬが、妻に代筆させる習慣は止めるやうそれと無く話さるべく候。淑子は実にヤサシク、毎度手紙を呉れ、悦ひ居候。順子も氣質にて居ることと存じ候。先便に基夫氏に鐵路に関する本が欲しいとの事故、今其専門の人に聞合せ居候。分り次第買入れて送るべく。書物の注文は最も悦ばしく

候。先日添田博士に手紙にて基夫氏の事頼み遣し候処、一兩日前返事あり、委細心得たとの事に候。又何か用事を多く言ひ付ける様（試験の爲めにもなる様子）頼み度と思ひ候も手紙にては廉立つかと思ひ候。其内お身より添田夫人を訪問し候、それとなく博士に頼む様為しては如何と思ひ候。

大崎御老人其後如何。天王寺の行李御引取りのよし、自分は何事も申すまじく候。矢末、落合共に途中よりも当地着後も通信致置きたるも、未だ何等の沙汰も無之候。先方より何か言ひ来るまでは当方よりは通信せぬ積に候。何れも身勝手の連中ゆえ、此方もその積に可致候。出発後一向尋ねもせぬ由、多分基夫夫婦が附いて居るからとか何とか蔭にては言ひ居ることと存じ候。

柳生老人も快方のよし、淑子より申来り、安心いたし居候。百瀬氏の事も淑子より大体の事申来り、同氏が若松夫人を賞め居るとの事も記しあり候。百瀬氏と若松氏との間には意見の齟齬も無き事と存じ候。其後の容子格別変りも無之候や。

先日も今頃は松茸が少しは来たかと思ひ居候処、御手紙にて方々より来候よし、悦び居候。如何にも浦山殿候。順子の言ふ様に当方に送りに貰ふことが出来れば、如何に嬉しからんと存じ候。日本茶は品はよくは無きも当地にも有之候間、御送りに不及候。ウツカリ物品を送らると、税が中々高く候間、大抵は見合せられ度候。先日も某人が日本より洋服を取り候に、数十円の税を課せられ、結局アメリカで作ると同じになり候との話に候。靴下は大和屋より毛のもの四足買ひ来り候が、品が弱い為めか、二月の間に三足とも踵に穴が明き候。一ツは地が堅い（多くはアスファルト又は石を敷いてあり）為めと存じ候。此も其内当地にて買ひ可申。日本より取り寄せて課税されては却て郵税だけ損になると存じ候。

自分儉約と申しても人に対してはそうも出来ず、今までに四回計り今岡、其他常に来訪の学士連中を同伴支那料理を御馳走いたし候。石川氏にも天長節に招かれたるも断り、その代り菊花一鉢三弗のを贈り置候。先日は又三浦環女史

第一回出演に招かれ、只も行かれず五弗ばかりの花環を送り置く、今朝も手紙にて厚く礼を言ひ来候。他人に対しては相当に致居候間、御安心有之度候。儉約は自分だけの事に候。今岡氏は時々活動などにも案内いたし居候。同氏も儉約一方故、□馳の金は一文も遣わず、活動も自分の案内にて始めて見物して悦び居候。活動は廉なるものは一人前十セント均一、少し高いのは二十五セント、其以上は一弗半迄まで有之候が、高くて二十五セント以上の処には案内せず候。如何に儉約しても中々金が入り候。食事は朝は月何程になるか不明に候が、パン五セント（二人二日分）、牛乳五セント、其他バタ十セントにて十日位は持ち、コーヒー三十五セントにて約一ヶ月は持ち候。今岡氏には牛乳半分だけ金を出させ、跡は金を取らず。此は今岡君も朝飯を全部自分の御馳走になるも心持悪かるべしと存じ候故に候。故に同君は月七十五セント（日本の金にて一円半）にて一月分の朝飯が済む訳にて、大悦びに候。自分昼飯はクラブにて五十セント、夜食は寓の食堂にて六十五セントに候。但他に招かれること屢々ありて、昼飯は月十弗、夜食は十四、五弗にて済むべし。洗濯は月に二、三弗に上り候。ホワイト・シャツは一週間に三ツは取り替え候、中々ヨゴレルには驚き候。靴磨は一回五セント、月に数回にて済み候。散髪は月一回三十五セントに候。詰り書物、紙、状袋、郵税其他にて月に十五弗位は入り候。瓦斯は至て廉にて月二十セント位、電灯は二弗位に相成候。結局毎月極まりて出るものは、

| | |
|--------|---------|
| 四十弗 | (屋賃) |
| 四弗 | (掃除老婆) |
| 二十四、五弗 | (昼夜二食代) |
| 十五弗 | (今岡氏手当) |
| 二十弗 | (諸雑費) |

計 百四弗位

其他小遣が多少入り候。それ故殆ど餘裕は無之候。今月はニューヨークに行

き候為め、餘分の物入あり、来月早々原稿訂正の礼をせねばならず旁、来月は送金六ヶ敷くと存じ候。来月末には又クリスマスの送物も少しは入るべく候間、来月は送金せず、一月になりて早速送るべし。年末何とか繰り合せ頼み入候。留守の入費も少らぬことと心配いたし居候。

俸給は毎月金券を書留にて送る様、文科事務室の^{エンドウ}円藤氏に金壹円（十分分書留料）渡し候。葛岡氏に頼み呉れと申し置たるが、円藤氏失念したることと存じ候間、此手紙着き円藤氏に電話にて其旨話さるべく候。金は確に一円紙幣にて同氏に渡し置候（其日葛岡氏も藺田氏も不在なり候為め円藤氏に頼みたる訳に候）。

『図書集成』送り出し候由、荷積証は御送り頼み候。金の事は先日図書館長に大体申置候が、運賃分かり次第御通知あるべく、其上にて館長に金の用意を頼み申すべく候。自分立替は無論六ヶ敷候間、館長より請取次第吉川男に宛て送り可申。其上にて運賃だけ同男より請取らるべく候。書物の代金は四百五十円と安井氏に申置たる積に候が、四百円に相成候や。

此も確なる処を通知あり度候。

スウィフト氏の礼餘り六ヶ敷候はば、明年自分帰朝の節何か買ひ求めて持参すべく候。先便姉崎君と相談してはと申入置候が、相談され候や。若し六ヶ敷候はば、右様致し候、其表にては其俵になし置かるべき候。先日スウィフト氏には手紙及絵端書送り置候。

十月送候金は請取られ候ことと存候。

長井真琴氏宛の原稿は明治聖徳紀念学会（加藤博士^ま主裁）に返へすものに候、先方より取るに来る筈に候、電話あり候故^{食の}食の^{名が}名が一寸電話にて話さるべく候。

渋谷男廿九日当地来着の旨、先日電報有之。只今色々歓迎の相談いたし居候。兎角事多く候、何処に居ても妙に事の多い時にブツカリ候ば不思議に候。

先日順子の注文の絵本探して買ひ入れ、発送いたし置候。武にも二冊入れ置候。箱入りの小さいのは附属の青鉛筆で撫でると絵が黒く出る仕組みに候。此は順子にと思ひて買ひ候。別に絵端書六枚入れ置候。此は来二十五日が

Thanksgiving と申し候キリスト教祝日にて、此地方にては最も嚴重になり。親族など招きて七面鳥を食ふ由に候。随て絵端書も七面鳥のもの多く候。此絵端書は五セント及十セント店にて買ひ、六枚五セント。絵本は十セントのものと五セントのものにて候。鉛筆で塗る分は三十セントに候。人形と花との切り抜き二つ入れ置候、五セント及十セント店に行く物によっては相当の物にて役に立つものも有之候。先日送り届の白粉類何時でも又送るべく候間、申越され度候。

当大学の雑誌に今度来任の外国教師三人の履歴と写真とが出で候もの三冊寄来候間、一冊郵送いたし候。外に新聞附録一括郵送致候。此には戦争の写真載せあり候。

当地の気候は実に妙にて、今以て夏の薄毛シャツ（股引だけは大和屋の厚いのに致候）だけに候が、それで外套（百瀬氏より貰ひ候分、此方少々薄手なり）を着て外を歩行すると必が汗をかき候。詰り表面の寒い割にドコか暖かいところがあるかとも思はれ候。先日は朝三十八度（華氏）、夜二十八度といふことにて、氷も張り、一寸細雪降り候が、それにて外を歩行く汗が出で候。内にて何時でも入浴出来る故、汗をかきて帰ると直ぐ入浴して暖まり候。此だけは便利に候。

今日は当大学とエール大学とのフットボールの試合ひにて、此は米国にて最も有名のもの。之を見ぬと人中で話が出来ぬといふほどのものに候、それに行かんといはし居候。明日日曜郵便締切り故、此にて筆を止め候。匆匆。

二十日

宇之吉

繁子殿

2. 続・米② [1915年] 11月24日

十月末日附手紙昨日到着披見いたし候。皆々丈夫の由安心いたし候。スウィフト氏謝礼の事委細相分り候。中島博士御骨折り被下候ことは謝し候も普通の

礼金にては差出かね候間、若し後れ候差支無らば、明年帰朝の節、当地の土産物と日本にて買ひ候物とを合わせて紀念として差支差出すことは如何と存候。それにては餘り後れるとあれば、御申越の如く百円位の品を御贈り置可然候。屏風は応接間のは七十五円と記憶いたし居候。銀座の高島屋にて買ひ入れ候。手箱は百円位にてよき物有之候や。餘り小く見栄のせぬも如何。銀製の花盛器は百円位にて相当の物無之候や。その辺にて然るべく取計候頼み候。然し金は都合つき候や。心配いたし居候。中島博士にはその中礼状差出可申し候。

謝礼はクラブとは全く関係無きことは明にして置き度候。先日来今夜挙行の御大典祝賀「菊祭」、廿九日来着の渋沢男歓迎の事にて彼此用事多く候。今夜は小生主人側を代表して挨拶もなし、来賓をも受け候。来人男女百名餘も来る筈。三浦環女史外にオペラ会社より好意を以て二、三名寄越す筈に候。明日郵便締切なるも明日は休日故、今日此手紙を出し候。

山川、穂積、三島三氏男爵となり候由、学界の為に悦び居候。山川氏にはその内御出であり度候。

昨年洗濯させたる襟巻ある筈、夜分外出には入用となるべしと存候間、郵送あり度候。当地には右様の物は無きかと存候。但新しき物を買入れには不及候。古物ならば税もかからぬかと存候。

英国及び当国にて目下大評判の小説一冊別便にて送り候。半分ほどは読み候も跡は止め候。言葉は訛りを多くしたる処あり、一寸分かり悪きかと存じ候。誰にか質問しては如何。

順子と武とに絵端書送り候。別にフードボールの絵端書も別便にて送り候。

今日多忙故此にて筆を止め候。今朝起き出でし処、雪少し降り居候、然し寒さは左ほどには無之候。匆匆。

十一月廿四日

繁子殿

先日川侯の千代子より手紙来候。

第一回送金は最早到着と存じ候。

3, 続・米③ [1916年] 日にち不明 絵葉書1枚 服部纘宛

(表) 写真 Widener Library, Harvard University (図4)

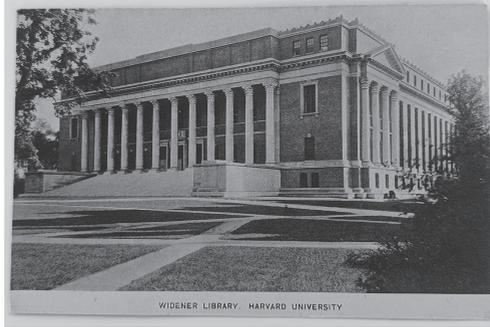


図4 長男服部纘宛の絵葉書(表)

(裏)

纘どのへ

毎日勉強の由、悦び居候。

今頃は学年試験にて忙しきことと存じ候。夏の入学試験も有り候故、学年試験が済み候はば少し庭でもイザルなり、其他適當の運動をして身体を丈夫に為す様望み候。

別の方はポストンに在る当マサチューセッツ州庁をマグネンコムの光にて写したものと見え候。此は自分の室の在る当大学の図書館に候。

フランクリンの絵端書六枚送り候。皆に説明して遣る様頼み候。母上の眼段々御よろしき由、安心致居候。猶ほ注意して上げる様頼み候。

父より

4, 続・米④ [1916年] 2月23日付書簡

一月二十七日附御手紙只今到着。当方より音信無し候とて大層御怨みにて

「薄情」云々、「気の入りの人と遊びに忙しい」云々との事認め有之、意外の事に驚き申し候。前便にも申す候通り日本行郵便締切の日には一度にても投函を怠り候事無し候。一度は知らぬ間に締切の日が繰上げられ候故、端書を出し候。一度は定日に投函に行き候に二日ばかり前に繰り上げられてあり、今岡君と共に驚きて、已むを得ずそのまま投函為めに、一信を發しソコネたることあり候のみ。其他一度にても定日に投函せざりしことは無し候。薄情等の怨みはツヤツヤ思ひかけざること候。他家には無論無沙汰がちに相成居候。他家に出してお許に出さざり候ことは一度も無之候。又クリスマス、新年共に一日も全く遊び候日は無之、「気に入る人」云々は前便にも詳しく説明いたし候如く、全く誤解に候。何故に然かく自分を深く疑はるるか。二十餘年の夫婦も半年の間に左ほど疑を以て見るほどに心が分らぬものにやと残念に存候。自分の行ひに一点疾ましきこと有之ならば、何れの方面にても御聞合せなさるべく候。先日は当方にても久しく音信無き故、心配いたし候。船は有り、当分よりは発信しても、其間に日本より何も来ぬことも有之。何故か不明に候、当方の便は失せたること無きや、日記の日附にて分り可申候。決して一度も怠らず候が、何故に間が左様に切れたるかは自分にも分り不申し候。先日試験休み中にてても一日も遊びは致さず原稿を整理し居候次第にて、只だ一日餘り頭が重いので、電車にのり郊外に行き候のみ。何故に左様に疑はるるか。反へす反へすも口惜しく存候。自分はそれどころには無之、お身の服やら纒のことやら、常に念頭を去らず、時々夜半に眼覚めて、色々留守の事を思ひて、堪えかたく心苦しく、何か急に電報でも来はせぬかと胸騒ぐことさえ有之候。今岡氏は何を云ひ送るか存ぜず候へども、同氏に知られて恥ぢる様な後暗き事は一事も無之候。其外の人にしても何事を通信するかは知らず候へども、私行上非難さるべき事は決して無之候。公の事は今日日本より来り候漢文学会等聯合席上の端書、岡野義三郎氏の手紙封入いたし候間、御覧相成度候。

半年の別れの為め、二十餘年の間に知り候吾が心に疑を挟まぬ様呉々も頼み

候。少しは自分の心中をも御察し候有度候。

時々風を引き候事も有之候へば、用心してえして、一度も学校は休まず候。然し朝何時まで寝て居ても（風邪の時に十時頃まで床に在りしこと二、三回）今岡氏はドウかしたかも尋ね呉れず、今夜は風の気味故早く寝ると、寝ても翌朝よくなつたかと言わず、唯一人で自分の身体を用心するだけに候。而して精神的にも肉体的にも何等心に疾ましき事を為さざるに有らぬ疑を以て見られては、自分も誠に心苦しき次第に候。今日も風の気味故朝の講義を終り、学生一人十時過より一時間ばかり疑義を質しに來りしを引受けて説明し候。昼過より少し横になり居る処に御手紙來り、披見して驚き且悲しみに堪えず候。絶えず此様の疑を以て見られては自分の頭は終に狂ひ可申候。餘り慘酷なる仕打と存候。何卒邪推と疑念とを去りて、自分を信じて呉れる様いたし度候。今岡氏には成るべく用事を多く頼まぬ様いたし居候間、自分の事の爲めに同氏が自宅に通信出来ぬ事などは断して無之候。自分は今岡氏には出先きと歸る時間の予定とを申置く習慣に候が、今岡氏はメツタに自分に右様の事申さず候。（特別の場合の外は）日中は多く学校に在りて、夕方帰り候。歸りて來た時、自分が風を引いて寝て居ることなどが有つてもドウかしたかとも言わず、その間に人が來ることが有つてもいい加減の事を申し居る様に候。然し來訪の人の音がすれば、自分は何時^マも起き、出でて面會いたし候。随分ツラ^ママない生活に候。同情の無き人か遠慮か、自分には分かず候。此様な生活をして居るからとて、他に同情を求める必要も無し、唯自分の職務に対する準備に日も足らざる次第に候。

滯米日数も最早百日位に相成候。六月廿五日再び相見ん日を樂みて待つのみ候。思へば、今回の渡米はお身には有らぬ疑を起させ、自分は忙しい思を為して、ツマラぬものと今更ツクツク悔み候へども、職務未了にて歸ることも出来ず、前便申陳候通り、一人心を苦しめ、左右考慮の上、六月九日の船と定め申し候。此様の事についても誰一人相談相手も無之、一人で考え、一人で決する外無し候。此決定についても一日でもアメリカに長く居たいからだなど疑を

容れぬ様頼み候。職務上後の非難少からしめんと考え、一日も早く帰り度き、情と相戦ひて苦心の上終に決定したることを御察し頼候。

先は右のみ。匆匆。

二月廿三日

宇之吉

繁子殿

此く疑を受くるに就いては、返へす返へすも自分の不徳を悲み申し候外無之候。行年五十にして猶ほ此不徳、自分ながら口惜しく候。唯益々徳を磨くの外無之。お身の疑は自身には善徳と思ひて感謝いたし候。

餘り心苦しく堪え難き故、御手紙を見ると直に此を認め候が、郵便締切は二十六日故、今日投函しても無効故、日記と共に二十六日投函いたすべく候。

暫しの旅行にても家を思はぬ日無き、自分がアメリカに来て家を忘れた様に思はるるは何故か自分にも分らず、日記には一一書かぬからとて疑はる訳も無之と存候。今後とても一一日記には書き申さず候。

ノンキに遊び居る様に思はれては續等に対しても残念に候。帰朝の上、原稿を見てもドレほど忙しかりしかは分るべく候。

風にて少し苦しき処御手紙によりて益々頭を痛め苦しく相成候故、此にて筆を止め候。

5. 続・米⑤ [1916年] 5月12日付書簡

一昨日手紙差出し候置き候後、引続き健康にて最早全快に有之候。今日は朝より夜まで日記にある如く、汽車、電車、自動車にて駆け廻り候も別に疲労も無之。此分にては大丈夫と存候。今日小包にて窓かけ（前便に記したるもの）出し置候間、請取次第二階の南北のガラス戸の処に取付けられ度候。

到頭出発前夜まで毎日何か会が有候ことに相成り候が、何れも酒の無い会故、日本の送別会よりは楽に候。然し十分注意いたし居候。餘り多く喰わぬ様可致候間、御安心有之度候。

出発は十九日にて、色々人の説も有之、当日午後六時ポストン発、七時頃同地の港よりニューヨーク行の汽船に乗りて、ニューヨークに行くことに致候。其方一晩緩に寝らるる利益有之故に候、翌早朝ニューヨーク着、同日夜行にてニューヨークを去り、フィラデルフィアに向ひ可申居候。荷物はトランク二個ポストンよりシアトルに手荷物にして出し置く積に候。土産物、カサ張る物が出来たためトランクに入り切れずに困り居候。何とか工夫せねばならずと存候。

出発迄日数が少なく、講義は猶三回為すべきニ付、中々忙しく候。

出迎の事等は前便に屢々申候通に頼み候。シアトル乗船の時打電可致候。

金は十日に二百弗送り候が、残金五百弗は為替にするかドウするか猶ほ考へた上の事に可致候。

土産物は予算以内にて切上げ申候。万一不意の入用もあるべしと存じ、安い物を少し餘分に用意致候間、大抵差支は無之と存候。

明朝は早くよりブリマウスと申す処に参るべきニ付、今より寝るべし。此にて筆を止め候。

皆々丈夫にて身心共に平安の顔を横浜にて見ること今より一日千秋の思にて待ち居り候。匆匆。

五月十二日夜十一時 宇之吉

繁子殿

当地よりの通信は十五、十七日にて終りと致候。

6, 続・米⑥ [1916年] 5月21日付 絵葉書1枚

(表) city college of New York City (図5)



図5 繁子夫人宛ての絵葉書(表)

(裏)

(四) 饗せられ、二時頃辞し、コロンビア大学、ニューヨーク市大学、美術館、グラント將軍墓等を観て、六時少し過ぎ再び一宮氏を訪ふ。家永博士も来り、夫人の手料理にて主客四人(一宮氏は家永氏を同時帰来)にて色々話を為し候。十一時過ぎ辞し、家永氏に見送りを受け、Pennsylvania Station (7th Avenue 32nd street) より乗車。夜半発車。乗車と同時に就眠。

五月二十一日ワシントにて

宇之吉

【謝辞】本資料の調査・翻刻に当たって、所蔵者である賀来孝子様にご大変お世話になった。謹んで感謝の意を表する次第である。

服部宇之吉家書解題·翻刻續篇

陳 捷 (CHEN Jie)

本稿是日本東京帝國大學文學部教授、中國思想史研究者服部宇之吉在中國、德國留學以及在美國哈佛大學任教期間寫給夫人服部繁子及家屬的家書的整理稿。

服部宇之吉在擔任東京帝國大學文科大學助教授期間於 1899 年接受日本文部省資助到北京留學，當時的計劃是先在中國留學兩年之後再到德國學習兩年漢學研究及教學方法。但是，由於 1900 年 6 月在北京遭遇義和團事件被包圍於公使館區，解圍之後不久便提前回國，於同年 12 月出發前往德國，先後在萊比錫和柏林學習。1902 年，清朝政府有意招聘日本學者到京師大學堂從事教學，服部宇之吉被當時文部大臣菊池大麓電報召回，隨即接受清政府聘請擔任京師大學堂師範館正教習，於當年 8 月 30 日攜夫人及三個孩子出發前往北京。服部宇之吉 1909 年 1 月任滿回國，在京師大學堂師範館任職六年半之久，為清末教育制度的創設和教育改革做出了貢獻。1913 年，美國哈佛大學接受畢業生捐款開設日本文化講座，招聘日本教授前往授課。東京大學文學部宗教學研究室創始人姊崎正治做為第一位受聘者於 1913 年秋至 1915 年在哈佛大學教授日本宗教史及相關課程，服部宇之吉做為該講座第二位教授，於 1915 年秋至翌年 5 月在該校教授東洋思想。

關於服部宇之吉 1899 年至 1900 年在北京的經歷，他本人回國後曾將其在此遭遇義和團事件前後的記錄整理為《北京籠城日記》出版。近年筆者又發現並整理了服部自出發前往中國之日開始記錄的日記稿本《北馬錄》，刊載於本刊第 182 冊。在此之後，筆者協助服部後人賀來孝子女士調查整理其家藏資料，有幸得見

服部從德國回國前以及在哈佛大學任教期間寫給夫人服部繁子的 5 通家書及所附日記，在徵得賀來女士同意後，加以釋文、標點及解說，發表於本刊第 184 冊。

本稿收錄了前稿發表之後新見服部宇之吉在北京、萊比錫、柏林留學以及在哈佛大學任教期間約 20 通家書，整理工作包括對書信原文進行釋文、標點，根據內容考訂其年代，解說部分對每通書信內容加以考察，並參考同時代其他在外留學、遊歷者的記錄做了一些補充。這些書信的內容與前稿同樣反映了服部宇之吉在中國、德國留學以及在美國任教期間的學習研究和教學經歷、日常生活、人際交往、異域見聞和心境的變化。感謝賀來女士再次惠允將其整理公佈，希望這些資料能夠為學界深入了解服部宇之吉生活的時代及其學問與人生提供幫助。